

中国国民政府・国民党の

正規戦とゲリラ戦

——盧溝橋事件から武漢陥落まで——

菊池 一 隆

はじめに

抗日戦争時期に関して、日本では意外なほど中国軍事史、特に中国側から見た各戦闘史に関する研究は少ない¹⁾。ただ、日中戦争の本格的解明には、やはり軍事史、戦闘史は避けて通ることはできず、かつ日本側からのアプローチだけでは不可能で、中国側からも見る必要がある。そうしてこそ、立体的、かつ構造的に実態を明らかにでき、その本質も考察可能となる。のみならず、従来の中国共産党（以下、中共と略称）系の八路軍、新四軍による遊撃戦、いわゆるゲリラ戦にのみ焦点を当てる中国での研究から脱却し、国民政府・国民党軍の正面戦場の全貌、実態、及び特色を押さえる。时期的には、一九三七年七月の盧溝橋事件以降、三八年一〇月武漢陥落までの時期に焦点を絞る（図1）。いわば「日本攻勢・中国防禦」時期である。そうした中でも平型関、台兒莊両戦闘で

は、中国が勝利を取ることができた。

本稿の特色は、第一に、戦闘史を真正面に据える。従来、台湾では国民党中心の戦争通史的なものが幾つか出版されているが、日本では、盧溝橋事件、南京占領後の「南京大虐殺」問題に関して激論が展開されていることを除けば、国民党戦闘史を通史的、もしくは各戦闘を扱ったものはほとんどない。こうした研究現状は早急に打開する必要がある。結局、日本の「速戦速決」と中国の持久戦はどのように推移していったのか。

第二に、中国側の戦争の実相を正確に描ききれていなかった面があることも否めない。そこで、本稿では、中国軍側の動向からアプローチし、特に国民党軍の戦闘を重視し、その主要戦闘を抽出することで、その実態と特徴を押さえる。こうした試みによって日中戦争の新たな断面に光を当てることを目指す。特に、中国戦線では遊撃戦が大きな役割を果たしたと考えており、これを重視する。

一 国民政府・国民党の軍事機構・戦略・戦術

——蒋介石の遊撃戦構想——

抗日戦争の中で遊撃戦はいかに位置づけられるのか。まず、最高国防会議主席の蒋介石（国民党総裁）の遊撃戦に対する見解を明らかにしたい。

蔣は持久抗戦を考えており、広州陥落から武漢撤退までが第一期で、交通便利な地帯での戦闘であり、日本軍は自在に進出できた。第二期は複雑な地形、山岳、砂漠が交錯し、交通、給養が不便な戦場であり、日

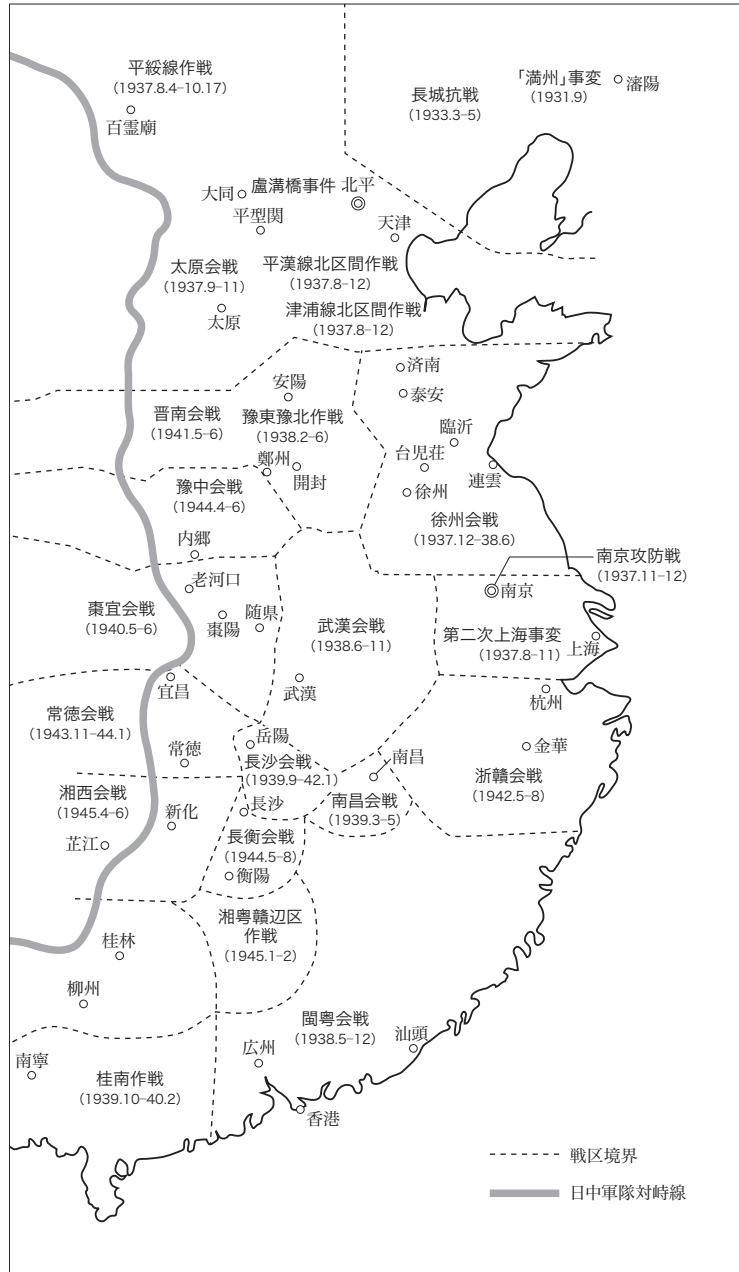


図1 国民党軍の主要戦場図 (1931.9-45.8)

出典：『中国抗日戦争史地図集』中国地図出版社，1995年，287頁から作成。

本は技量を展開できない⁽²⁾。だが、我々の武器と装備ではまだ大規模攻撃戦に従事できない。そこで、絶えず実を避けて虚を撃つことを研究し、間隙に乗じる方法で、各地の敵に打撃を加え、退却させる⁽³⁾とする。このように、正規軍ですらいわゆる正面から戦うのではなく、遊撃戦的な色彩を濃厚に有しており、それによって日本軍に勝利できるとしたので

ある。ところで、蔣は、一般人が遊撃隊と別働隊の区別がないと批判し、いわゆる遊撃戦は実は正規戦の一種で、とりわけ規律良好、戦闘力の強い正規部隊こそが担当できる。臨時に民衆と武器を集め、遊撃隊と称することはできず、こうした部隊は別働隊で、地方政府や当地の機関・団体

が武装民衆を集め、軍官を招聘し、敵後の擾乱、交通、兵站、倉庫などの破壊を担当できるように訓練する⁽⁴⁾。と。すなわち、正規軍が遊撃戦を担当し、民衆遊撃隊に対しては別働隊との位置づけを与える。では、蔣の民衆認識はどうか。愛民精神をもって一般民衆をして軍を信頼させ、実際の行動で擁護させる⁽⁵⁾。このように、民衆を受動的な存在として、協力させるとした。

とはいえ、蔣は「第三次南嶽軍事會議訓詞」（四一年一〇月）の中では以下のように述べる。要約すると、現代の戦争は軍隊戦争の外、さらに経済戦、外交戦、思想戦、宣伝戦などがある。武力戦も複雑で、例えば、歩兵戦は現代の戦争でも主要であるが、補助する戦法はさらに多く、「第五縦隊戦」（偵察戦、突撃戦、奇襲戦、偽装戦、反間諜戦、遊撃戦）と「国民組織戦」がある。その方式は多いが、最も緊要なのが偵察戦、突撃戦、奇襲戦である。敵陣、敵後に潜入し、偵察、擾乱、突撃、奇襲し、あるいは謠言により動揺させる。その他、敵後の破壊戦、例えば、敵の経済、交通、通信、兵站、倉庫などの破壊が「第五縦隊」の戦術に包括される。特に偽装戦と反間諜戦は重視する。荷担ぎ人夫、馬夫などに偽装し、敵隊伍に混入し、偵察、襲撃をおこなう。その他、前方陣地内でも戦地隣接の民衆が組織する「国民組織戦」を実行する。一般国民は積極的に団結、自衛し、国民政府軍の指揮下に戦う。これらの力量は正式軍隊に比してさらに偉大である。以後、各級政治部は各地各級政府と密接に連絡をとり、一般民衆を組織、訓練し、抗敵自衛の各種方法と技術を教える。要するに、現代の戦争では、正規の歩兵戦は三割を占めるだけで、「第五縦隊戦」と「国民組織戦」は七割を占める⁽⁶⁾。いわば「第五縦隊戦」も非正規戦であり、「国民組織戦」は国民政府軍の指

中国国民政府・国民党の正規戦とゲリラ戦（菊池）

揮下での民衆を動員、訓練し、自衛戦を戦わせる。ただし民衆の自発性、独自の行動までも許容しているようには見えない。

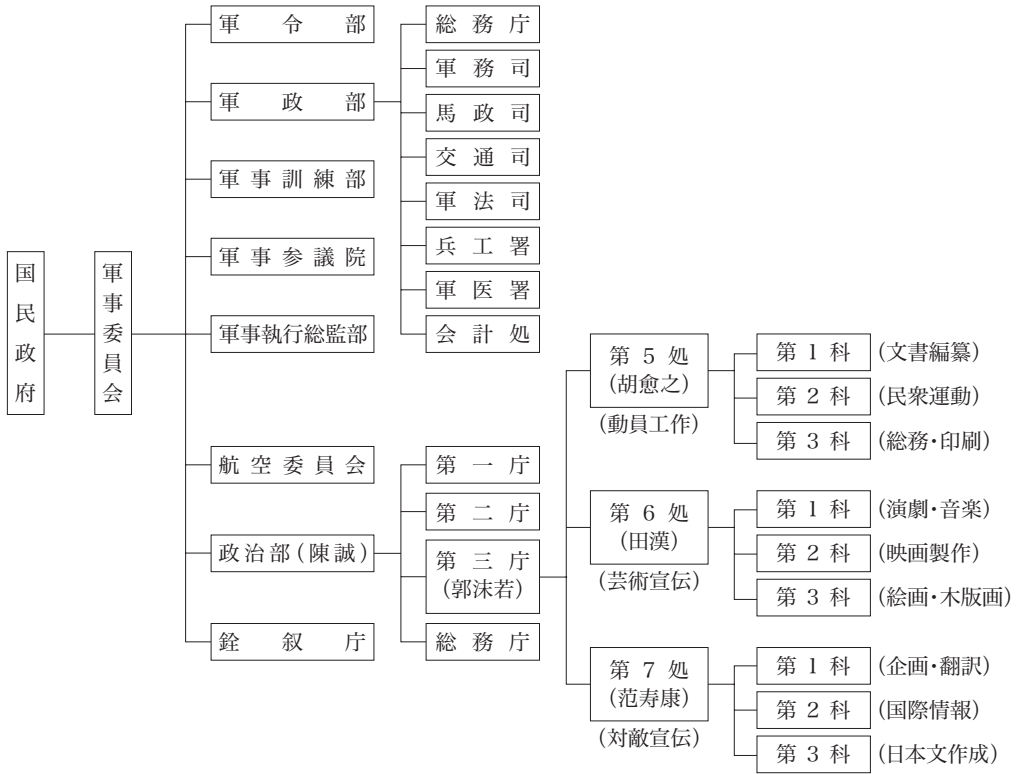
国民党広西派の白崇禧（軍事委員会副総参謀長）は、蒋介石が南嶽軍事會議で「第二期抗戦では、遊撃戦は正規戦より重い」と指示したとする。そして、例えば正規戦では、まず偵察機により敵情と地形の調査後、爆撃し、砲兵を派遣して射撃し、その後、戦車を出動させ、歩兵を前進させる。中国の装備ではこうしたことができない⁽⁷⁾、と述べる。結局、中国は力量的に持久戦下での遊撃戦に傾斜せざるを得ず、それ故、民衆の役割は極めて重要なものとなる。広東省政府秘書処出版の『広東遊撃戦』に記載されるように、「民衆は兵士より重い」、「遊撃戦は正規戦より重い」⁽⁸⁾が一定の共通認識となっていた。今後の勝敗の鍵はすべて民衆把握にあり、傀儡や敵から民衆を争奪できるか否かにある。

軍事委員会組織系統図は表1の通りである。同表は四〇年段階のもので、相違があると考えられるが、各部の基本的な業務内容を理解することができよう。「修正軍事委員会組織大綱」（一九三八年一月一七日公布）によれば、

軍事委員会は委員長一人、委員七〜九人を設け、中央政治委員会が選抜し、国民政府が特命する。委員長は全国陸海空軍を統率し、並びに全民を指揮し、国防の全責を負う。参謀総長は委員長の幕僚長で、本会所属の各部会庁を指導する。軍事参議官は委員長への諮詢に備える。軍事参議院は軍事研究、建議の機関である。なお、弁公庁は命令、文書発送、伝達、及び総務・警備などを主管す。

(1) 軍令部は、①国防建設、地方治安、及び陸海空軍の動員作戦、②後方勤務の計画、運用、③情報、及び国際政情の収集整理、④参謀人

表1 軍事委員会組織系統図



出典：①李雲漢『中国国民党史述』第3篇，1994年，412-413頁。②「軍政部組織法」『外交部公報』第13卷1・2号合刊，1940年4月。③井上学「解題」『同盟資料』別巻，57-58頁から作成。なお，第一庁は「軍内党務」，第二庁は「民衆組織」，第三庁は「宣伝」である。そして，第5処の第2科長は張志讓，第6処の第1科長は洪深，第7処の第3科長は馮乃超であった。

員、陸軍大学、測量総局、及び外国駐在武官の統轄と運用を主管する。

(2) 軍政部は、①陸海軍の建設・改善、人馬の維持補充、交通・通訊の整備、及び全国総動員計画、②陸海軍の軍費、糧秣、被服、装具の補充修繕、及びその他の軍需品の調達・分配、練兵場・工廠・倉庫の建設・管理など、③武器弾薬の調達・分配、④陸海軍の衛生・保健、及び衛生機関の準備・運用を主管する。

(3) 軍訓部は①陸海軍の訓練・整理、及び陸海空軍の検閲、②軍事学校の建設・改善を主管する。

(4) 政治部は①陸海空軍の政治訓練、②国民軍事訓練、③戦時服務、及び民衆の組織化と宣伝をおこなう。

(5) 軍法執行總監部は、軍事規律の維持、軍法執行事務を主管する。

(6) 航空委員会は空軍建設、空軍の保育、訓練、指揮を主管する。

(7) 銓叙庁は陸海空軍人事の選考、勤務評定、及び恩賞の事務を主管する。

いわば、蒋介石は中国陸海空軍最高統帥の軍事委員会委員長に就任したことで、圧倒的力量を有し、戦争全体の指揮権を発揮できることになる。

日本は会戦当初、軍事力は質量とも圧倒的に優位に立っていた。兵員が非常に多く、かつ訓練も行き届い

ていた。軍需工業も発達し、装備も優良であった。七・七事変勃発時、日本側の総兵力は四四八万一〇〇〇人（その内訳は、現役兵三八万人、予備兵七三万八〇〇〇人、後備兵八七万九〇〇〇人など）。そして、陸軍は常備師団一七個、陸軍機一四八〇機（予備補充機を含む）、海軍は一九〇余万トン、海軍機二七〇〇機とある。

それに対して、中国側は、①陸軍——陸軍現役兵一七〇万余、陸軍正役兵ゼロ、陸軍統役兵ゼロ、国民兵はまだ開始していない。壮丁訓練は、三六年までに訓練完了者が約五〇万人余などである。歩兵が一八二個師、及び四六個独立旅。騎兵が九個師、及び六個独立旅、砲兵が四個旅、及び二〇個独立連隊。その他、特種部隊がある。②海軍——第一艦隊一二隻、計一万七四八四トン、第二艦隊は大小一九隻、計九三三九トン、第三艦隊は一四隻、計一万四七一七トンなどの外、巡防艦一四隻、測量艦七隻、及び魚雷艇など五隻がある。③空軍——第一、第九大隊、及び直轄隊の計三一中隊。計三一四機である。

例えば、飛行機数だけを見ても、日本が四一八〇機に比して、中国側は僅かに三一四機しかなく、その差は歴然としていた。つまり制空権は日本が握っていたのである。その上、中国は地方は不安定で、治安のため各地に多くの部隊を配備する必要があり、その結果、開戦前、中国陸軍で第一線に動員使用できる兵力は、歩兵が八〇個師、九個独立旅、騎兵九個師、砲兵二個旅、及び一六個独立連隊だけであった。¹⁰なお、一大隊（營）は三中隊（連）で編成され、約五〇〇〇人。三小隊（排）で一中隊。連隊は「団」である。

中国は、第一期作戦で主導的に全面戦争に突入させ、日本を長期持久戦に引きずり込んだ。かくして、日本の「速戦速決」という戦略方針は

中国国民党政府・国民党の正規戦とゲリラ戦（菊池）

破産した。その上、日本軍は海を渡ってきており、気候、風土、生活習慣には種々の困難が伴った。

日本軍にはこうした問題点があったとはいえ、中国軍にも課題が多々あった。

第一に、規律が悪いため、①命令に服従させ、指揮を統一する。②部隊は相互信頼すべきである。また、「友軍」（中共軍）との相互信頼も樹立すべきで、疑惑を持つてはならない。戦場は全体として一つの生命体で「友軍」の失敗は我々にとっても挫折である。「友軍」と言い争うことは敵を利する。こうしたことを強調するのは、国共両軍の中に当初から軋轢が存在したことを意味する。

第二に、戦略的には、軍事的に優位な日本軍に対して、持久消耗作戦で空間を以て時間と取り替え、次々と抵抗を繰り返した。その間に戦争準備、戦争体勢を強化する。

第三に、戦術・戦闘面では、①機動性と強靱性をもつ。中国軍の最大の欠点は正面突撃を知るのみで、損傷が多い。そこで、我々は機動力を發揮し、日本軍の弱点を攻撃すべきである。兵力平均配置である一線式の防禦は日本軍に突破されやすい。したがって、優勢な兵力を、地点を選んで重点配備する。②地形や建造物を利用することで、一方で損害を減少させ、他方で中国軍を隠匿し、かつ火力の威力を増大できる。¹¹このように、実際の戦闘面では遊撃戦的色彩を強めていた。

ところで、何応欽¹²によれば、八年抗戦全体は三段階に分けられるという。それも日本軍攻勢↓対峙↓中国攻勢・勝利という段階を経たという。いわば毛沢東の持久戦論と類似しており、このことは国共にかかわらず、持久戦による三段階的発想を有していたことの傍証となる。

【第一期】(守勢時期) 第一期抗戦は三段階に分かれる。盧溝橋事件から南京退出(陥落)まで第一段階、徐州会戦の終結まで第二段階、及び武漢大会戦の終結まで段階である。作戦初期、日本軍は優越な装備によって短期間で中国の野戦軍を殲滅し、我方の重要拠点を攻撃し、屈服させ、「速戦速決」の目的を達成しようとした。それに対して、中国は戦略面からいえば、空間を以て時間に換え、決戦を避け、一部の兵力を平綏、平漢、津浦各鉄道沿線に重層配備し、多くの防衛線を設け、敵を消耗疲弊させる外、主力を長江方面で使用し、日本軍を江南の湖沼、山岳地区に誘い、その優位性を發揮できないようにした。そして、次第に日本軍を消耗させる目的を達成し、以て「速戦速決」の企てを粉碎し、長期作戦の基礎を確立した。国民政府の武漢移動後、持久抗戦のために、核心である武漢を強固にし、戦略目的を東は津浦、西は道清、及び作戦の必要に適應させる。そのため、三八年一月、以下の調整と配置をおこなった(表2)。

【第二期】(対峙時期) 中期作戦(武漢大会戦後)、日本軍は戦場が拡大することで、兵力が不足し、同時に中国軍が西南山岳地帯に退却、そこを守備し、戦争の長期化を生み出した。その後、日本軍は「速戦速決」から「以戦養戦」に変わり、戦略的攻勢から戦略的守勢に転換せざるを得ない。この期の作戦は戦略的に小勝を積み重ね、大勝することにある。一方で、機に乗じて攻撃と反撃をおこない、日本軍を消耗させる。他方で日本軍背後で広範な遊撃戦を發動し、日本軍占領区を前線に変えた。並びに日本軍を点と線のみを固守させ、「以戦養戦」の企図を打破し、全面的に持久化させる。このように、第二期には遊撃戦の比重が高まっている。同時に抽出部隊の整理訓練を実施し、次第に戦力を強

化した。四一年太平洋戦争の勃発により中国と連合軍の共同作戦以降、戦略的に持久抵抗から攻勢防禦に改めた。中国大陸で絶えず局部的に出撃し、以て日本陸軍一二〇万人余を牽制し、日本軍が南進に追加派兵することを不可能とさせ、太平洋方面の連合軍への圧力を軽減した外、同時に中国はビルマに派兵し、連合軍の作戦に協力し、中印公路を打通した。その上、(アメリカなどの)外援を勝ち取り、大量の新式装備を獲得し、それによって新軍を建設し、戦力を増強し、反攻の準備をした。

【第三期作戦】(反攻時期) 作戦後期は全力で連合軍の行動に配合し、日本軍に対して大規模攻勢を發動し、すべての失土を回復し、最終的勝利を収めることを決定した。そこで、中国軍は広西の日本軍を肅清後、続いて広州に攻勢をかけようとした時、四五年八月日本は無条件降伏した。¹³⁾

果たして、この時期区分でよいのだろうか。中国独自の主体的な役割を強調するためか、第二期抗戦に太平洋戦争、アメリカ参戦が包括され、その位置づけが弱いように感じられる。その上、反攻時期である「第三期作戦」があまりに短い。

表3は、国民政府の財政支出である。これによれば、七・七事变勃発により、「全民抗戦」に突入した三七年には当然六六・四%と高く、四〇年にはビルマルト閉鎖、日本軍の仏領北部インドシナ進駐の外、国民党一党独裁を揺るがす国共対立の激化、国民参政会での野党各派の民主化要求に深い危機感を抱いた国民政府が対日軍事、中共対策のため、大量の軍事費を投入したことを示している。四〇年が外的内的に国民政府存立の最大の危機と見なされたのである。その延長線上に皖南事变(新四軍事件)が位置する。しかし、四一年以降、軍事費の割合は四

表2 第1期主要軍配置概況(1938年1月)

第1戦区(平漢鉄道方面)	第2戦区(山西方面)	第3戦区(蘇浙方面)	第4戦区(両広方面)	第5戦区(津浦鉄道)
司令長官 程潛	司令長官 衛立煌	司令長官 顧祝同	司令長官 余漢謀	司令長官 李宗仁
第20集團軍 南震	南路前敵總司令 閻錫山	第10集團軍 劉建緒	第12集團軍 張達	第3集團軍 李品仙
騎兵第14旅 張占魁	第3軍 曾万鍾	第19集團軍 羅卓英	第62軍 張瑞貴	第11集團軍 廖磊
第1集團軍 宋哲元	第14軍 李默庵	第23集團軍 唐式遵	第63軍 李漢魂	第21集團軍 鄧錫侯
第53軍 方福麟	第15軍 劉茂恩	寧波防守司令部 王曉南	第64軍 李振球	第22集團軍 顧祝同
第77軍 万福麟	第17軍 高桂滋	溫台防守司令部 徐旨乾	第65軍 王曉南	第24集團軍 楊森
騎兵第3軍 鄭大章	第93軍 劉戡	獨立第4旅 周志群	第8軍團 獨立9旅	第59軍 李振球
第68軍 劉汝明	北路前敵總司令 傅作義	獨立第4軍 遊擊總司令 黃紹竑	獨立20旅 虎門要塞司令	第3軍團 海軍陸戰隊
第92軍 李仙舟	第35軍 傅作義	新編第4軍 遊擊總司令 黃紹竑	計9個歩兵師、2個歩兵旅。その他、特種部隊がある。	計27個歩兵師、特種部隊がある。
第106師 李克	新編第2師など 金憲章			
第118師 張焜田	第18集團軍 林彪			
新編第8師 蔣在珍	第115師 賀龍			
新編第35師 王勁哉	第120師 劉伯承			
騎兵	第129師			
計25個歩兵師、2個歩兵旅、2個騎兵師である。特種部隊がある。なお、騎兵第4師までは「直屬」とあり、司令長官直屬と考えられる。	他に直屬の第33軍、第34軍などがあり、計27個歩兵師、3個騎兵師、3個騎兵師、3個騎兵師。その他、特種部隊がある。なお、第18集團軍は「直屬」とあり、司令長官直屬と考えられる。	計24個歩兵師、6個歩兵旅、その他、特種部隊、遊撃部隊がある。なお、新編第4軍はいわゆる新四軍で、中共軍である。		
第8戦区(甘寧青方面)	武漢衛戍總司令部	西安行營	閩綏靖公署	軍事委員会直轄兵団
司令長官 蔣介石(兼)	總司令 陳誠	主任 蔣鼎文	主任 陳儀	委員長 蔣介石
副司令長官 朱紹良	第2軍 劉延年	第11軍團 毛炳文	第75師 陳琪	第20軍團 湯恩伯
第17集團軍 馬鴻逵	第49軍 劉多荃	第17軍團 胡宗南	第80師 福建保安第1旅	第13軍 湯恩伯
第80軍 孔令恂	第54軍 霍揆彰	第21軍團 鄧定珊	福建保安第2旅	第52軍 閻麟徵
第81軍 馬鴻逵	第60軍 盧漢	曹編騎兵第1師 曹編騎兵第6軍	福建保安第3旅	第85軍 王仲廉
第82軍 馬步芳	第75軍 周焜	門炳岳	海軍陸戰隊第2旅	第2集團軍 孫連仲
騎兵第5軍 馬步青	江防總司令部 (海軍陸戰隊も包括)			第8集團軍 張笈奎
挺進軍司令 馬占山				第26集團軍 徐源泉
計27個歩兵師、3個歩兵旅、その他、特種部隊がある。	計14個歩兵師、1個歩兵旅、その他、特種部隊と江防守備部隊がある。	計12個歩兵師、4個歩兵旅、3個騎兵、その他、特種部隊がある。	計2個歩兵師、4個歩兵旅がある。その他、地方要塞部隊がある。	計17個歩兵師がある。

出典：『抗日戦争時期国民党正面戰場重要戰役介紹』四川人民出版社，1985年，187-190頁から作成。この他、後方には整理訓練部隊が26個歩兵師、未出動部隊が14個歩兵師，7個歩兵旅がある。全国総兵力は計210歩兵師，35個歩兵旅，10個騎兵師，18個砲兵連隊，8個砲兵大隊がある。その他，上表の如く，特種部隊が存在する。

中国国民政府・国民党の正規職とボランティア職(豫刑)

表3 国民政府財政中の軍事費の割合(単位, 1000元)

年	総支出	軍事費	%
1931	571,967	302,619	52.91
1932	589,110	338,656	57.49
1933	872,664	385,785	44.21
1934	1,203,583	386,591	32.12
1935	1,336,921	362,030	27.08
1936	1,893,977	555,226	29.32
1937	2,091,324	1,387,557	66.35
1938	1,168,653	698,001	59.73
1939	2,797,018	1,536,598	54.94
1940	528,756	377,339	71.36
1941	10,003,320	4,880,835	48.79
1942	24,459,178	11,347,007	46.39
1943	54,710,905	22,961,267	41.97
1944	151,766,892	55,318,967	36.45
1945	1,276,617,557	421,297,013	33.00

出典：吳岡編『旧中国通貨膨脹史料』1958年, 153頁。

八・八%、四六・四%、四二%、三六・五%と漸減していく。このことは、戦後建国に向けて次第に行政、財政、金融、生産に振り向けられていく予算の増大を示している。

二 日中全面戦争の起点・盧溝橋事件における豊台の位置

では、ここで日本軍攻勢・中国軍防禦時期における主要戦場での各戦闘実態に論を進めたい。

一九三七年七月七日北平(現在の北京)近郊の永定河にかかる盧溝橋付近の龍王廟で、十数発の銃声が鳴り響いた。これが宣戦布告なき日中戦争開始の狼煙で、中国全面抗戦を開始する契機となった。盧溝橋事件

(中国では、一般的に「七・七事変」と称す)である。当時、平津(北平・天津)一帯に宋哲元の第二九軍が駐屯していた。同軍は元來、馮玉祥の西北軍の一部で、全軍で計四個歩兵師、一個騎兵師、及び五個独立旅で、総兵力は一〇万人前後である。抗日救国運動の影響を受け、抗日意識が強かった。豊台の日本軍一個中隊は盧溝橋の北一キロに位置する龍王廟一帯で軍事演習を始めた。そこは、中国軍兵舎の近くで、挑発的であった。夜一時、日本軍は「二名兵士失踪」(生理現象のため、一時隊列を離れただけであった)を口実に宛平城内の強制捜査を要求した。中国軍はこれを拒絶した。この後、「失踪兵士」は帰隊したにもかかわらず、日本軍はそれを隠し、失踪原因を日中共同調査をすることになった。だが、調査が開始されようとした時、日本軍は中国軍の撤退、日本軍の入城という理不尽な要求を突きつけた。当然、第二九軍は拒絶した。すると、日本軍は宛平城に砲撃を開始し、守備軍も応戦し、戦闘は八日夜明けまで続いた。そこで、日中談判が開始されたが、その間も日本軍は二度攻撃し、守備軍は撤退した。八日午後、日本軍は最後通牒を突きつけ、守備軍に永定河東への撤退を要求し、さもなければ継続して宛平城を攻撃するとした。中国軍は撤退を拒絶し、第一一〇旅長何基澧、第二一九連隊長吉星文は自ら前線で作戦指揮を採り、一陣地を堅持し、断乎とした反撃を命じた。盧溝橋北面を防衛する一個中隊はほとんどが戦死した。日本軍は龍王廟を攻撃し、九日には宛平泉城を砲撃したことで、事件は拡大した。この二日間の戦闘で、日本側戦死者は一人、中国側が約一〇〇人であった。中国側被害が圧倒的に大きく、中国側の準備不足を物語り、他方日本側の戦闘準備が整っていたことは明白といえよう。九日双方の口頭協議により日本軍は豊台に撤退、中国軍は

宛平以西に撤退し、宛平防衛は保安隊が引き継いだ。¹⁴

ところで、冀察政務委員会（委員長宋哲元）によれば、盧溝橋事件発生までの経緯は以下の通り。七日夜一二時、松井武官が冀察軍政当局に電話を寄こした。昨夜、日本軍第一中隊が盧溝橋で郊外演習を実施するとすぐに銃声を聞いた。そこで、兵を集めて点呼すると、一人兵士が足りないことが判明した。そこで、拉致された日本兵がいると見なせる宛平城に、即刻日本軍隊を入城させ、捜査を求め、と。我方は現在深夜であり、日本兵の入城は民衆の不安を引き起こし、かつ中国側の盧溝橋部隊は七日、宛平城外に出ておらず、銃声は我方が撃つたものでは決してないとして、入城を婉曲に断った。だが、松井はすぐに再度電話を寄こし、不許可でも、日本軍は武力防衛のために進軍すると述べた。この時、日本側はすでに宛平城の包囲体勢をとっていた。そこで、中国側は再び日本側と交渉し、双方が人員を派遣してまず調査をおこなうこととした。日本側は寺平副佐、桜井顧問であり、中国側は宛平県長王冷齋、外交委員会専員林耕宇らであった。八日午前四時頃、宛平県署に到着した。寺平は日本軍の入城と調査との考えを固持したが、中国側はそれに同意しなかった。その交渉の最中、東門外で銃声、砲撃の音が鳴り響いたが、それでも中国側は鎮静を保った。だが、日本側の砲火は激しさを増し、ついに中国軍は正当防衛のために抵抗を開始した。¹⁵

八日午後、外交部亜細亜州科長の董道寧が日本大使館に赴き、口頭で抗議した。すなわち、「今回の事件の責任は我方にあらず、日本軍の挑発」にあり、嚴重に抗議する。並びに事態をさらに悪化させないために、即刻、一切の軍事行動の停止を請う、と。それに対して、日本大使館参事の日高信六郎は、「日本は今回の事件を拡大する意思はなく、悪

中国国民政府・国民党の正規戦とゲリラ戦（菊池）

化には至らない」と述べ、むしろ中国側の軍事行動の制止を要求した。日本外務省は事変を拡大させず、今後の行動は中国の出方によって決めると声明を出した。八日、日本軍部では、杉山陸相、田中軍事課長らが対策を協議したが、日中軍隊の衝突は、東京方面では驚きと訝しきをもって受け止められている、とする。外務省、陸軍省は共に事件不拡大を望んでいる。八日北平電によれば、日本側代表今井武官、中国側代表秦徳純が解決方法について協議した。中国側が努めて事件拡大を防止し、和平解決を原則とするとし、日本側も同意した。だが、具体的条件には隔たりがあり、日本側の要求では、まず宛平城内からの中国軍撤退であり、それに対して中国側は各軍が元来の駐屯地に戻り、再び真相を調査することを主張した。¹⁶

中国側も八日臨時戒嚴司令部が成立させ、正司令は馮治安、副司令に石友三らが就任し、臨戦態勢を強化した。この結果、北平城内、及びその郊外のすべての駐留軍が馮治安・第二九軍の指揮下に入った。そして、全市の軍警に戒嚴体勢を命じた。東直門、朝陽門などはがっちり閉められ、かつ第二九軍兵士が城壁上から警戒している。八日に二度日本軍は入城を試みたが、拒絶された。その頃、平漢鉄道を北上する列車は長辛店まで止められ、南下は完全にストップした。八日早朝、冀察政務委員会の秦徳純は馮治安らと緊急会議を開催し、対応を協議した。並びに王冷齋、林耕宇らを日本大使館に赴かせ、今井、松井らと解決方法を協議している。¹⁷ 盧溝橋事件後、近衛文磨内閣は一応「現地解決、不拡大」方針を声明した。しかし、他方で軍事力の大量動員によって中国に圧力をかけていた。これでは、中国が日本の「現地解決、不拡大」方針に疑念をもったとしても致し方ない。

一〇日午後五時半、盧溝橋方面では、日本軍は突然、大砲、機関銃で中国軍を攻撃した。夜に入ると、日本軍一個中隊が龍王廟の中国陣地に突撃し、中国軍も反撃した。そこで、二個中隊で増援し、続けて猛攻した。中国守備軍はかろうじて対峙段階に持ち込んだ。一日早朝、日中双方首脳が会談した結果、双方の部隊とも元の地点に撤退することを決め、宛平城は中国軍が駐屯防備し、他方、日本軍も豊台など元来の駐屯地に戻った。ただ豊台の日本軍がにわか増大し、民家を強制的に占拠したため、民衆は次々に逃亡している。一日晩、北平郊外では常に銃声が聞こえ、一二日午前一時、日本軍は機関銃、大砲で中国軍に猛爆を加え、盧溝橋一帯で両軍が衝突したとされる。なお、日本軍機は天津市上空を二〇分間、旋回した。一日関外から天津に來た日本軍機は一三機で、その内、戦闘機六機、爆撃機三機、及び偵察機である。一日早朝、日本軍機は北平市の上空を旋回し、盧溝橋一帯を偵察している。

その他、『中央日報』(一九三七年七月二日)によれば、一日日本軍は関外から榆関へと出発し、すでに唐山に到達し、また三列車に分乗して天津を経て豊台に向かたとされる。さらに一日、日本軍は大量の輜重を準備し、豊台に運搬しようとしている。トラック三台もガソリンを満載して豊台に向かった。北寧線の榆関、北戴河などに駐屯していた日本軍の大部分が唐山に集結している。これらも通州を経て豊台に向かうものと考えられる。榆関にいる関東軍の車六、七列が通州に向かい、天津の日本軍はトラック約三〇台に多くの兵士、武器、弾薬を載せて豊台一帯に増援に行くものと模様とする¹⁸⁾。このように、日本軍の動きは活発で、それも豊台に大量に集中していたのである。つまり日本側は一方で交渉しながら、他方で増兵し、中国側に圧力をかけようとしてい

たことは間違いない。

こうした日本軍の動向から考察すると、盧溝橋よりも、むしろ豊台が重要な位置を占めていると見なせる。なぜか。図2によれば、豊台に集中した日本軍が盧溝橋のみならず、广安門、宛平、南宛などに出動していることが分かる。一般的に盧溝橋周辺から豊台までの地図から考察されるが、盧溝橋、豊台、北平城の三地点を包括する地図を見ると、豊台は盧溝橋と北平城の中間に位置している。日本軍は豊台占領によってその間に割って入り、中国軍勢力を分断した。だが、そのことは同時に盧溝橋、北平城双方から中国軍の挟撃を受ける危険性が高まる。それ避けるためには盧溝橋、龍王廟で問題を起こし、当地の中国軍を駆逐、かつ宛平城を占領、拠点とすることで、背後の憂いをなくすることができる。

そして、宛平城と豊台と結びつけることで、日本軍の背後を強化し、その最大の目的たる北平城攻略に全力であたることができる。したがって、「銃弾一発」の有無、偶然性か否か、及び「一人兵士行方不明」は重要性はほとんどなく、後景に退き、むしろ北平城に焦点が当てられる。そして、その攻略は間違いなく計画的段取りに沿ったものといえよう。他方、中国は盧溝橋事件が全面戦争突入の重大な契機となる軍事的飽和状態に達していたと見なせるのである。

『中央日報』(一九三七年七月二日)に掲載された「社評…論盧溝橋事件」によれば、①日本は近年、河北省各地にしばしば増兵し、豊台方面には兵營、練兵場をつくり、さらに「盧溝橋」にも同様な設備をつくるうとして、我方に阻止された。「辛丑和約」(いわゆる義和団議定書)で規定する各国の駐屯地は黄村、廊坊、天津、塘沽、唐山、秦皇島、山海関など一ニカ所で、その目的は、「京師」から海通道に至る(交通)

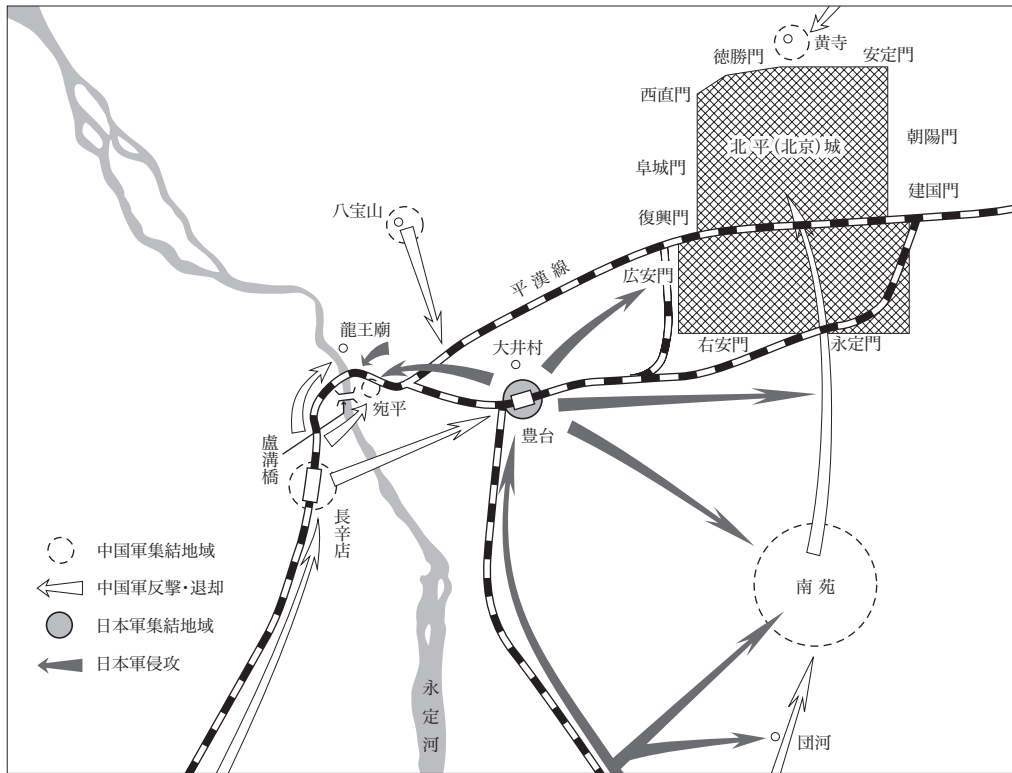


図2 日本軍侵攻・中国第29軍反撃図（1937.7.7-29）

出典：『七七事変』中国文史出版社，1986年の付表から作成。

の断絶を防ぐ点にある。したがって、各国の駐留兵士数にも制限がもうけられた。ところが、近年、日本側は河北省に大量の軍隊を駐屯させ、かつ駐屯地域も「辛丑和約」の規定に基づいているといっても誰が信じるであろうか。②ある国の軍隊が他国の国境内で随時演習をおこなうことは不法な行為である。「辛丑和約」の締結時、ただ兵の駐留、防備（治安）を認めただけで、演習権を認めてはいない。③一般的な演習は実際の作戦と異なり、空砲を用いる。従来、日本軍もこのようにしてきた。ところが、今回の演習では実弾を用いた。その下心を推し測るに、中国軍を攻撃、中国の土地を侵略する「九・一八事変」（「満洲事変」）を再演しようとしているのではないか。このように、不信感をあらわにしている。

七月一二日、日本側は、強引にも今回の事件は中国側の計画的な武力抗日であると断じ、「中国側の謝罪と将来の保障」のため重大決意をしたとの日本政府声明を発表し、①宋哲元の謝罪、馮治安の罷免、②盧溝橋からの中国軍の撤退、③抗日団体の取締を要求した。一八日当地では、中国軍第二九軍が蒋介石の従来からの「不抵抗政策」に則り、遺憾の意を表明した。そして、日本軍との武力衝突を回避するため、一九日中国軍の盧溝橋からの撤退、抗日団体の取締の徹底という、中国側にとって屈辱的な協定に調印したのである。²⁰⁾

ところが、それより二日前の七月一七日蒋介石はすでに江西省廬山で声明を発表し、盧溝橋を失えば、「北平が第二の瀋陽となり、そうなれば首都南京が北平と同様な運命を辿らないとはいえ

ない」とし、盧溝橋事件の解決が「最後の関頭」とした。もし解決できなかった場合、「当然、犠牲あるのみ。抗戦あるのみ」との態度を表明していたのである。そして、①いかなる解決も中国の主権と領土を侵犯してはならない、②冀察政務委員会に対する国民政府の統制の続行、③国民政府派遣の官吏更迭の拒否、④第二九軍の現地駐屯地の制限拒否という「四大原則」を明らかにした。遠隔地であったが故に、当時の電報事情から「四大原則」が事前に第二九軍には伝わっていなかったものと考えられる。これを国民党系各新聞も強く支持し、日本政府の要求は事実上拒絶された。他方で、蒋介石は第二九軍長宋哲元に「領土を守るために必死決戦の準備」をし、「主権を一切喪失しないという原則」を保持すべしと電令した。また、軍政部長何応欽に四川から南京に戻り、全面抗戦を計画すべきと電報で督促した。同日第二六軍総指揮孫連仲、第八四師高桂滋、第四六軍長龐炳勳、第五三軍長万福麟らに即刻保定、石家荘一帯に集結し、第二九軍の対日作戦支援を命じた⁽²⁾。

日本は、中国が軍備力脆弱で、日本軍に長期抵抗は不可能と考え、「三ヶ月」以内に打倒できると考えていた。日本政府は四〇万軍隊に動員をかけ、武力で中国をねじ伏せようとした。かくして、日本軍は三方面から華北に侵攻した。第一方面は、関東軍派遣の鈴木・酒井混成旅団で、第二方面は朝鮮駐屯軍派遣の第二〇師団、及び第三方面は平津駐屯軍の河辺旅団を基幹としていた。かつ板垣征四郎の第五師団は朝鮮を経由して入関し、日本海軍と合同で天津・塘沽に攻撃をかける。天津には、日本軍機二〇〇機あまりが待機した。華北における日本軍はすでに五個師団、総勢一〇万人以上に達し、七月一六日豊台を占領、宛平に侵攻した。一八日日本軍は最高司令部を豊台に設けた。そして、二五日日本軍

は平津守備軍に対して包圍態勢をとり、廊坊、広安門に再度攻勢をかけた。激戦後の二六日、日本軍は廊坊、かつ北倉、楊村各駅を占領、平津鉄道は不通となった。同晩、日本軍は第二九軍長宋哲元に最後通牒を突きつけ、第三七師は四八時間以内の北平撤退を要求した。日本軍は回答を待たずに、二七日払暁、優勢な砲火、飛行機の掩護の下、通県守備軍に攻撃をかけた。二八日、第二九軍は局面打開を図り、局部的反攻に出た。そして、一旦豊台駅と甲村の日本軍飛行場を占領した。だが、日本軍は数十機の飛行機と大砲の掩護の下、南苑、西苑に猛攻をかけ、守備軍陣地はほとんど潰滅した。副軍長佟麟閣らも戦死した。かくして、守備軍は撤退し、七月二九日北平はついに陥落した⁽²⁾。日本軍は北平と同時に、天津攻撃をおこなった。三〇日大量の日本軍が大沽に上陸し、三方面から包圍し、激戦後、天津を占領した。

三 第二次上海事変と国民党軍の抗戦と上海民衆

一九三七年八月一三日（十一月二日の三ヶ月間）日本は華中に楔を打ち込むため、上海侵攻を開始した（中国では、「八・一三事変」と称す）。上海は中国最大の工商業都市で、かつ重要貿易港であった。国民政府にとって極めて重要な経済基盤であった。三二年第一次上海事変以降、日本は上海の虹口、楊樹浦一帯に軍隊を駐留させていた。その上、上海に海軍陸戦隊司令部を特設し、多数の艦艇を長江に常駐させ、黄浦江沿岸を巡回した。日本は上海戦を画策し、南京国民政府に圧迫をかけた。

八月九日日本海軍陸戦隊の大山勇夫中尉らは軍事情報収集のため、虹

橋軍用飛行場に自動車で強行突入を謀った。哨兵は「停車」を命じたが、大山は無視した上、発砲した。中国軍も応戦し、結局、大山は絶命した。いわゆる「大山中尉射殺事件」（中国では、「虹橋機場事件」と称す。日本では、一般的に上海で海軍特別陸戦隊の大山勇夫が自動車で視察中に射殺とされている）である。上海の日本軍はこれを口実に、国民政府に上海保安部隊の撤退を要求した。国民政府が拒絶すると、日本軍は陸戦隊に戦闘準備をさせ、同時に呉淞一帯に艦艇三〇隻を集結させた。ところで、三二年の「淞滬停戦協定」によれば、国民政府は上海に保安隊のみ保留できるとなっていた。だが、日本に不信感を強めていた国民政府は密かに京滬（南京―上海）鉄道沿線駐屯の京滬警備司令張治中に対して第五軍を率いて上海周囲の防衛に即刻赴くように命じた。同時に、西安の宋希濂三六師に上海防衛戦への参加を命じた。八月二日第五軍第八七師の主力が楊樹浦に進軍し、また、八八師は虹口公園以北の防衛に入った。²³⁾

他方、日本側は一〇日、第八戦隊、第一水雷戦隊、呉第二特別陸戦隊、佐世保第一特別陸戦隊の発進を命令し、軍艦三〇隻が上海の呉淞一帯に集中した。この措置は中国側を刺激した。一二日国民政府は最高国防会議を開催し、蒋介石を陸海空三軍の大元帥とし、軍事委員会を抗戦のための最高機関とすることを決定した。八月一三日日本陸軍の二個師団の派兵を決定した。一四日蔣は「日本の留まることなき侵略」に対して「自衛抗戦」を声明した。上海周辺には、ドイツ軍事顧問団に組織され、ドイツ製武器で装備した最精鋭六個師団約三万人が配置され、上海防衛体制は強化された。つまり、日本軍はドイツ製の武器と戦うことになる。一五日「南京政府の反省を促すため、今や断固たる措置をとるに

中国国民政府・国民党の正規戦とゲリラ戦（菊池）

止むなきに至れり」と声明し、一七日「不拡大方針」を事実上破棄した。そこで、蔣も日本軍に総攻撃を命じた。上海では激烈な市街戦が展開され、市民の人的物的被害は膨大なものになった。

第二次上海事変は三段階に分かれる。

【第一段階】（1937.8.13-8.22）中国軍が攻勢をとり、一挙に上海の日本軍を殲滅し、その後、援軍の日本軍を迎撃しようとした。国民政府外交部は日本政府に対して、一四日声明を発表し、「蘆溝橋事件の発生以降、（日本軍の）種々の行為は均しく我国の領土主権を侵犯し、国際各条約に違反している」と断じた。したがって、武力を以て領土と主権を自衛するが、その一切の結果は日本が完全に責任を負うべきである、と強調したのである。

当時、全国民衆の怒りと抗日救亡運動は日増しに高まり、上海守備軍の士気は高く、日本軍は出鼻を挫かれた。戦場は虹口、楊樹浦の市街区一帯にある日本軍占領地域の周囲であった。八月一四日中国軍は日本軍に反撃し、一六日中国空軍は再度、日本軍の拠点にある公大紗廠、虹口地区を爆撃した。中国側の第八七師、第八八師は日本軍に対する包圍網を縮めた。かくして、浦東の日本軍は三菱、大倉、日清などの倉庫や埠頭を放棄せざるを得なくなった。第八八師は日本海軍陸戦隊司令部を攻撃した。日本軍は強固な防禦設備と艦艇からの砲撃の掩護下に頑強に抵抗した。陸戦隊司令部は鉄筋とセメントによる堡塁建築で、匯山埠頭一帯はビルが林立し、軽武器など装備が劣勢な中国軍には攻めにくい地域で、膠着状態に陥った。一九日宋希濂の第三六師が到着、一旦匯山埠頭に攻め入ったが、激戦となり、将兵三〇〇人余は建物内に逃げ込んだが、出口を日本軍の戦車に封鎖された上、放火され、全員が焼死した。

このように、中国軍は二方面から攻撃したが、日本軍は援軍を待つて拠点を死守した。

【第2段階】(8.23-10.25) 日中双方とも大量の援軍が到達し、日本軍は守勢から攻勢に転じた。日本軍は長江沿岸から上陸し、中国軍と激戦を展開した。中国軍は上海市区以北、瀏河以南、長江以西に三線の防衛線を引き、次々と抵抗した。八月二〇日国民政府最高軍事当局は全国を五つの戦区に分け、上海・江蘇省南部・浙江省は第三戦区であった。司令長官は馮玉祥、副司令長官は顧祝同であり、浦東方面は張発奎、淞滬近郊は張治中、江防は陳誠がそれぞれ指揮をとり、総兵力は約三〇万人である。重点防衛地区は長江沿いの呉淞、宝山、瀏河の一線であった。

八月二三日上海派遣軍司令官である松井石根の率いる日本軍が川沙などから強行上陸をおこなった。これに対して、張治中の第九集團軍、陳誠の第一五集團軍、薛岳の第一九集團軍が迎撃した。八月二三日日本軍一個旅団が日本艦艇の掩護の下、羅店の守備軍陣地を猛攻した。上海全戦局中、羅店争奪戦は最も激烈で、一進一退の一カ月余の戦いとなった。羅店は砲火により一片の焦土となった。日本軍は最初、艦艇からの砲撃、飛行機による爆撃後、歩兵を侵攻させた。中国軍の増援部隊も到着し、白兵戦となり、双方とも多くの死傷者を出した。日本軍は羅店で阻止され、戦術を改め、九月五日長江沿岸の陣地を打通するため、軍艦三〇隻を呉淞港に集結させ、守備軍陣地を一斉砲撃した。宝山防衛の第一八軍の將兵五〇〇人が日本軍の侵攻をそのつど退けた。だが、日本軍は焼夷弾も使用し、全城が火に包まれた。その間、日本軍の戦車、歩兵が城内に突入した。二昼夜の市街戦となり、將兵五〇〇人全員が戦死した。九月一〇日以降、日本軍の兵力は大幅に増強され、一〇万人以上、

重砲三〇〇余門、戦車二〇〇余台、飛行機三〇〇余機、大小艦艇七〇余隻が全線での攻勢体勢に入った。⁽²⁴⁾

九月になると、中国軍は四川、湖南、広東、広西各省からも動員され、最終的に上海戦に投入された中国側総兵力は七三個師団で、全国軍隊の三分の一に達した。このような大動員によって苦戦を強いられた日本軍も陸軍六個師団を投入し、総計二〇万の兵力で戦局の打開を図った。だが、中国軍の頑強な抵抗により、呉淞に上陸した日本の上海派遣軍が僅か一〇キロ進軍するのみに、一カ月もかかったのである。⁽²⁵⁾

しかし、一カ月余の戦闘で、中国守備軍の勢いは次第に弱まった。それに対して、日本軍は優位な武器を背景に、毎回、飛行機、重砲で爆撃後、煙幕を張り、戦車を突入させ、歩兵が続いた。この結果、中国守備軍の損傷は甚だしく、例えば、第一八軍の上級軍官の戦死者一人、負傷者は数十人に達した。そのため、何度も後退せざるを得なかった。中国最高軍事当局は北站、江湾、廟行、羅店などの第二防衛線に退き、抗戦継続を命じた。そして、九月二一日軍事委員会は蒋介石自ら第三戦区司令長官を兼任し、副司令長官には顧祝同が就いた。中国側も絶えず増援があり、淞滬一帶の中国兵力はすでに四〇万人余に達した。三〇日、日本軍は総攻撃を開始した。中国軍は再度戦線を建て直し、大場中心に激戦となった。一〇月七日日本軍は蘆藻浜北岸から守備軍を攻撃し、左翼陣地を突破した。さらに、日本軍は連続攻撃して大場を占領し、閘北、江湾の各守備軍の防備を切断し、退路を断とうと目論んだ。中国守備軍は活路を求めて反撃し、蘆藻浜以南を奪還した。そして、一五日中午守備軍に増援部隊である第二一集團軍が到着し、三方面に分けて反撃を開始した。だが、日本軍は全力で反攻し、他方、中国守備軍は軍糧補

給が困難となり、その上、雨が降り続け、壕に水が入り、飢餓、苦戦を強いられた。かくして、第二一集団軍約三万人は大部分が犠牲となり、二五日大場陣地は日本軍に占領された。

【第3段階】(10.25-11.12) 大場失陥後、閘北、江湾の守備軍も全滅を避けるため、戦略上、転移せざるを得なくなった。かくして、守備軍の主力は蘇州河以南の陣地に撤退した。戦場も市区周囲から市区に転じた。二六日晚、守備軍第八八師第五二五連隊の将兵八〇〇人が青天白日旗を掲げて鉄筋コンクリート七階建てのビルである四行倉庫を守った。

だが、二七日日本軍は四行倉庫攻撃を開始し、中国軍は四日間抗戦したが、日本軍の包囲を突破し、公共租界に退かざるを得なくなった。一月五日日本軍は杭州湾の金山衛などから大挙して上陸し、九日松江を占領した。中国軍は腹と背に日本軍からの攻撃を避けるため、全線退却を命じた。かくして、一月一二日日本軍は上海を占領した。第二次上海事変で、日本軍は海陸両軍二〇万人余と飛行機を動員したが、三ヵ月もかかって、やっと上海を占領できた。このように、日本軍は優位な武器によって勝利したが、中国軍、民衆の奮戦は高く評価できる²⁶⁾とする。

東戦場では、三七年一月中国軍の劉建緒部隊が杭州付近を防備した。一二月一九日日本軍は劉部隊に攻撃を加え、二二日劉軍は錢塘江南岸に移動し、二五日杭州も陥落した。とはいえ、三八年一月以降、中国軍は錢塘江南岸の陣地を固守しながら、他方で錢塘江北岸の滬杭線沿線に派兵し、遊撃隊と配合して日本軍後方に深く入り、打撃を加え続けた。また、宣城、蕪湖陥落後、安徽省南部でも遊撃戦が展開された。

上海民衆も積極的に抗戦に参加し、各種方式で中国軍を支援した。上海各界の民衆は文芸界救亡協会、学生界救亡協会、上海市紗廠工友救亡

協会などを組織し、宣伝、募金、演劇、慰問をおこなった。のみならず、全国各界民衆も積極的に上海抗戦を支援した。湖南学生戦地服務団、福建省民衆の組織する慰問団が前線で慰問をおこなった。海外華僑も献金を活発に集め、祖国抗戦を支援した。その額は一月一六日までで三六〇万元余に達した²⁷⁾。だが、一月上海での中国側の敗北は決定的となった。中国側の被害は大きく、激戦によって日本軍九一五二人に対して、中国軍二五万人といわれる戦死者を出した。とはいえ、中国軍の初めて見せた奮戦は、上海租界の外国人を驚かせ、中国の国際的地位を高めたという²⁸⁾。

ところで、こうした状況下で、看過できないことは、第二次国共合作・抗日民族統一戦線が成立していることであろう。つまり西安事変に連動する形ですぐに第二次国共合作が成立したかのような錯覚に陥りがちであるが、周知のごとく、第二次上海事変中の緊迫した状況下で成立していることである。三七年七月二五日廬山で周恩来は「国共合作公布のための宣言」を蒋介石に手渡した。「宣言」における三項の「基本政治主張」は①中華民族の独立自由と解放を勝ち取る。まず誠意をもって民族革命抗戦を迅速に準備、発動し、以て失地を収復し、領土主権を完全に回復する。②民権政治を実現し、国民大会を開催し、以て憲法を制定し、救国方針を規定する。③災害を救済、民生を安定、国防経済を発展させ、人民生活を改善すべきである。八月中旬、中共代表周恩来、朱德、葉劍英は蒋介石らと「宣言」と紅軍改編問題について、第五回目の談判をおこなった。蒋介石は三項の「基本政治主張」を削除し、「四項目保証」だけを残すように主張したが、中共が拒絶した。紅軍改編問題については、中共は国民党の政治部主任派遣に反対し、正副総指揮を設

けることを主張した。この時、第二次上海事変が勃発し、蒋介石は紅軍を国民革命軍第十八集團軍（八路軍）に改称し、総指揮に朱徳、副総指揮に彭徳懐を任命せざるを得なくなった。²⁹三七年九月二三日第二次国共合作が成立し、中共の合法的地位を承認した。かくして、国共両党を労働者、農民、小ブルジョア、民族資本家から大地主、大資本家までも包括する広範な全国規模の抗日民族統一戦線が樹立された。かくして、中国の分裂状態を望んでいた日本は中国全体を敵とする泥沼戦争に落ち込んでいくことになる。

ここで、ドイツ軍事顧問団に触れておきたい。ファルケンハウゼン將軍を団長とする軍事顧問団は中国軍の近代化と対日戦準備に尽力した。彼らは蔣に「機動戦、運動戦」の必要性を勧告した。三六年一月に日独防共協定がすでに締結されていたが、ドイツが中国を支援した背景には中国への武器と軍事プラントの売り込みを図るドイツ国防軍、ドイツ独占資本の利害があった。つまりドイツは政治的には日本との関係が強かったが、経済的には中国との関係が密接であったのである。その矛盾を打開するため、三七年九月からドイツ大使トラウトマンによる日中和平工作が推進されていた。すなわち、戦線の拡大阻止、事変の長期化を避け、日中和平を実現しようとする工作であったが、こうしたドイツによる和平工作は日本軍による首都南京の占領後、戦勝気分には酔った日本側の和平条件に①内蒙自治政府の承認、②日本軍の駐兵権、③賠償要求などのこれまでに以上で苛酷な要求が盛り込まれ、挫折した。蒋介石は「日本の要求に同意すれば、中国で革命が起り、国民政府は打倒される」と語ったという。³⁰日本の「速戦速決」の目論見は崩壊し、一六個師団六〇万人の日本軍が中国大陸に釘付けされることになる。こうして、

トラウトマン工作は実を結ばなかった。結局、日本の圧力により、三八年五月ヒトラーは軍事顧問団の引き上げを命令し、ファルケンハウゼンら二五人はドイツに帰国し、七人だけが残ることになった。

では、列強の対応はどうか。①アメリカは中国からの調停依頼を断り、さらに八月二五日、日本政府が中国沿岸を封鎖すると、F・ローズベルト大統領は、中国に武器、軍需品、戦争資材を運搬することを禁じた。何故か。当時、アメリカの投資額、貿易額とも、日本が中国よりもウエートが重かったのである。例えば、三七年アメリカの対日戦略物資輸出、すなわち屑鉄、鋼は前年比でそれぞれ一・四倍、三・一倍に急増していた。そうした日米経済関係を反映して、グルーら対日宥和論者が増え、力を持っていた。他方、日本でも親米派が多かった。いわば日本が戦争に入ることが、アメリカの利益につながった。そして、日本はアメリカから輸入した屑鉄、石油を使って中国を侵略したといえないこともない。②イギリスはアメリカより戦争拡大防止に熱心であったが、当時、首相チェンバレンはドイツなどのファシズム国家からいかにイギリスを防御するか熱心であった。だが、戦争が華中に拡大すると、欧米各地で、アメリカの屑鉄、石油輸出は「利敵行為」とする民衆の抗議運動が発生した。三七年一〇月ローズベルト大統領はシカゴで、日独を「伝染病患者」に例えた有名な演説をし、両国を「隔離すべし」と力説した。だが、ブリュッセル九カ国条約会議で、中国代表が対日経済制裁案を提出した時、支持したのはソ連だけであった。このように、英米は対日関係の悪化を望まず、対日宥和政策をとり続けていた。

③ソ連は日本に脅威を感じ始めており、三七年八月に中ソ不可侵条約を締結し、さらに三八年三月、七月それぞれ米ドル換算五〇〇〇万ドル

の借款協定を締結び、それによって大量の軍需品を中国に供与した。武漢陥落（三八年一〇月）までに、中国に戦闘機三三六機、爆撃機一四八機、戦車八二台の外、多数の機関銃、自動車等が提供された。その上、六個飛行機中隊を派遣し、壊滅状態の中国空軍を再建した。³¹⁾

四 首都南京攻防戦と日本勝利への幻想

日本軍は上海占領後、首都南京の防衛戦となった。これは「外衛線」防衛と「内衛線」防衛の二段階に分かれる。「内衛線」防衛は城郊外作戦と城内作戦の二小段階に分かれる。一九三四年〜三六年に国民政府軍事委員会は四個師団の兵力を上海・南京間に二線の外衛防衛線を引き、壘壕、トーチカを構築した。第一線は呉福線で、太湖を基本に、北は長江南岸の福山、南は常熟、蘇州、呉江、嘉興を経て杭州湾に至る。第二線は錫澄線で、北は江陰から無錫に至る線である。だが、こうした防衛線はほとんど役立たなかった。なぜなら日本軍は杭州湾上陸後、上海を占領後、兵を二つに分けて、一方は滬寧線に沿って南京に直進し、もう一方は京杭公路に沿って迂回し、南から南京を包囲した。同時に日本艦隊は長江を遡り、陸軍と共同で沿江要塞を攻略した。十一月九日第三戦区指揮部は上海から撤退した。この時、多くの部隊が先を争って逃亡し、呉福線陣地、さらに追撃を受け、錫澄線陣地へと退却した。かくして、一九日嘉興、蘇州、常熟などの軍事拠点はすべて陥落した。その後、日本軍は二方面に分かれ、太湖の南北に沿って南京に進撃した。中国第三戦区部隊の大部分は安徽省南部、一部は南京へと撤退した。

中国国民政府・国民党の正規戦とゲリラ戦（菊池）

ところで、三七年一月二〇日国民政府は重慶遷都を宣布している。

二四日軍事委員会は唐生智を南京衛戍司令長官に特命した。南京防衛部隊は、第二軍団、第六六軍、第七一軍など計一四個師、約一〇万人であった。唐生智の南京防衛計画によれば、①雨花台、天堡城などの防禦設備を骨幹とし、②要塞によって長江の封鎖線を掩護し、③各守備隊は物資、武器弾薬を準備し、それぞれが独立作戦をおこなうとした。³²⁾ 一月二〇日国民政府は日本の侵略の脅威の迫る南京から重慶に政府を移すことを決定した。かくして、政府機関や設備をまず武漢へと移動させた。蒋介石は高級将領会議で南京死守のために唐生智率いる一五万の兵を南京に残した。

太湖の南側では、日本軍が呉興を占領、北側では、一月二七日無錫を占領後、江陰砲台の守備軍と五昼夜にわたる激戦となった。日本軍は飛行機による爆撃、火器による猛攻をかけ一月一日砲台を占領した。日本軍は呉福線、錫澄線の両防衛線を突破後、三方面に分かれて進軍し、南京合撃を企図した。北路は滬寧鉄道沿線、及び丹陽、金壇、鎮江の一線に前進した。南路は京杭公路に沿って宣城、蕪湖の一線に向けて前進し、中路は呉興、溧水の一線に向けて前進した。丹陽、鎮江、溧水、宣城などの軍事上の重要拠点はすべて陥落し、南京「内衛線」防衛に移った。

三七年一月一日中支那方面軍司令官の松井石根は南京包囲攻撃を決定した。一月六日日本軍正面部隊が宣城、龍潭などの南京外圍陣地に達した。七日、ついに日本軍は主要陣地に三方面から総攻撃をかけた。これに対して南京守備部隊は背水の陣をとったが、「外衛線」防衛の失敗は南京城防衛をさらに困難にした。唐生智の命令によると、南京外圍

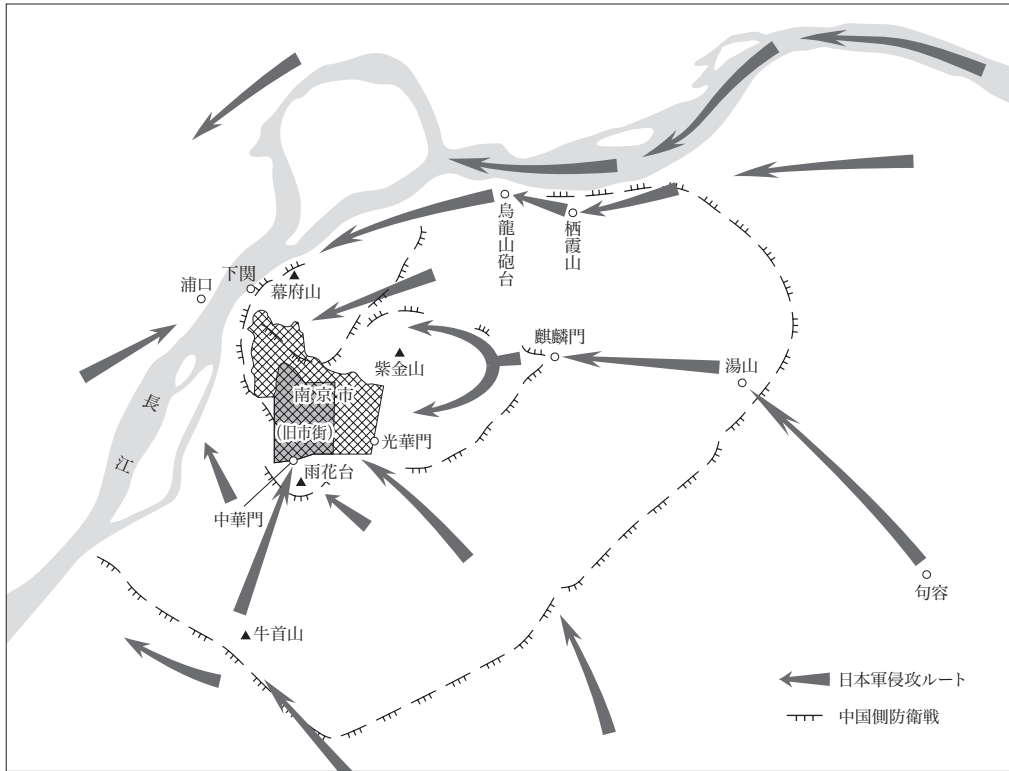


図3 日本軍首都南京侵攻図 (1937.11.13-12.13)

出典：『中国現代史地図集』中国地図出版社，1999年，133頁から作成。

陣地は、徐源泉軍が栖霞山、烏龍山陣地を守り、葉肇の第六六軍、鄧龍光の第八三軍は京滬公路から侵犯する日本軍を阻止攻撃する。宋希廉部隊は幕府山、下関付近に陣を張り、獅子山要塞と連繫し、阻止攻撃する。桂永清の教導総隊は紫金山、麒麟門中山門一帯に陣を置き、正面から侵犯する日本軍を阻止攻撃するなどであった。とはいえ、大部分は第二次上海事変で戦った撤退部隊であり、補給休養する時間もなく、戦闘力はかなり減退していた。

一二月月上旬、日本軍は猛烈な砲火により龍潭、湯山、江寧、板橋などの南京外圍陣地を続けざまに攻略し、南京城に迫った。雨花台の南で激戦となり、蕪湖と南京の連絡は切断され、城北の烏龍山陣地も破壊された。これにより南京城内が戦闘段階に入った。かくして、日本軍は前後して光華門、中華門から城内に突入した(図3)。同日蒋介石は唐生智に「南京総退却」を命じた。退却は大混乱し、守備軍、政府官員、民衆が城門に殺到し、圧死し、また江に落ち、溺死した者も数知れなかった。一二月一三日松井石根は四個師団を率いて南京城に「無血入城」した。その後、「南京大虐殺」が引き起こされた。南京は日本軍に包囲され、国民政府は南京放棄を決定し、唐生智部隊は長江を渡って逃亡した。この結果、南京は無防備で、各地から集中してきた難民の溢れる状態になっていた。一二月一二日夜、日本軍は南門に猛攻をかけた時、南京守備部隊のほとんど全ては撤退しており、残兵は武器を捨て、軍服を脱ぎ、国際安全地区に避難した⁽³⁴⁾。以上のように、一三日日本軍は南京

を陥落させ、抵抗を受けることもなく「無血入城」したのである。入城後、日本軍に対しての抵抗・武装闘争があったことは立証されていない。したがって、民衆のみならず、「便衣兵」を口実に、戦闘能力を失った唐生智部隊の残兵殺害も「虐殺」といえる。

ともあれ、首都南京の陥落は全国を震撼させた。一月一七日蒋介石は「我軍退出南京告国民書」を出した。動揺する民心を鎮静化する必要があったのである。要約すると、

中国の持久抗戦の最後の勝利の核心は、南京にあらず、まして各大都市にあらず、実に全国郷村の广大で強固な民心にある。したがって、全国同胞は今日の状勢下で徒に一時の勝負に拘泥せず、抗戦を最後までおこなう意義を確認し、最後の勝利の信念をもつべきである。①対日抗戦は三民主義と強権暴力の帝国主義との戦争であり、また被侵略民族が侵略者に対して独立生存を勝ち取るための戦争である。②全国同胞が不撓不屈で、屍を乗り越えて後に続き、随時随地、皆抵抗力を發揮し、日本軍の武力がいに窮まった時、最後の勝利が訪れる。③日本の中国侵略は実は世界侵略の開始である。中国抗戦には二義があり、一つは民族の生存独立のために戦い、もう一つは国際平和と正義のために戦うということである。⁽³⁵⁾ 以上のように、南京陥落は中国の敗戦を意味せず、信念を持ちさえすれば、正義の戦争であるが故に、最後の勝利が獲得できると強調したのである。

三七年一月日本軍は南京・上海・杭州の三角地帯を確保した後、むしろ守りに入り、杭州、富陽、吳興、宣城、蕪湖などで要塞を構築した。そこで、第三戦区、第五戦区が呼応して日本軍後方を遊撃し、その小部隊や交通に奇襲をかけ、運輸・補給を妨害した。三八年一月日本軍

中国国民政府・国民党の正規戦とゲリラ戦（菊池）

第一三師団は蚌埠に向け侵攻した。中国第三戦区は第一〇集團軍に杭州・太湖間、第一九集團軍は宣城・南京間、第二三集團軍は蕪湖・貴池間に移動して遊撃戦を実施することを命じた。かくして、二、三月に大少数十の戦闘を経て日本軍に重大な打撃を加え、一旦宣興、宣城などを奪還して杭州市に突入した。三月中旬、日本軍は金壇、無錫などから蘇浙皖辺区に五方面から攻撃を加えたが、中国軍は機動力を發揮し、日本軍の弱い部分を突き、その攻撃を停止させた。特に華中の日本軍主力を牽制し、徐州会戦に兵力を割く余裕を失わせ、その結果、後述する台兒莊での勝利に導くのに意義があった。⁽³⁶⁾

日本全国では首都南京陥落に戦勝気分が提灯行列がおこなわれた。だが、国民政府は敗戦を認めるどころか、首都を南京から武漢、さらに重慶へと移すことで抗戦続行の姿勢を明白にした。万が一重慶も陥落した場合ですら、「雲の彼方」に位置する雲南省昆明にまで退却しながら抗戦を継続する計画であった。日本は、次々と首都を移動させながら戦えるという中国の広大さを実感として十分認識していなかったといえる。

こうした状況下で看過できないのは遊撃戦であろう。淮河付近の防禦と江北で遊撃戦が戦われている。日本軍は南京占領後、江北へ進軍し、津浦鉄道を打通し、南北戦場を繋げようとした。三八年一月定遠は陥落した。廖磊集團が駆けつけ、淮河北岸で激戦となり、各守備軍は突撃を繰り返した。三月六日まで廖磊集團の一部が定遠に反攻した。また、周祖晃軍も定遠に積極的に反攻し、かつ至るところで大規模な遊撃戦を發動したのである。⁽³⁷⁾

五 太原会戦における国共両軍の協力

太原会戦(1937.9.13-11.8)は、抗戦初期における華北での中国軍(閻錫山の晋綏軍と蒋介石の中央軍)と日本軍との大規模な戦闘である。会戦は三十七年九月一三日大同陥落から十一月八日太原陥落までの約二カ月で、第二戦区が指揮した平型関戦、忻口防衛戦などによって構成される。山西省は東は太行、西は呂梁、北は恒山、南は中条の四大山脈に囲まれ、地勢は堅固である。省都の太原は正太、同蒲両鉄道の交わる重鎮である。内には北部に忻口が障壁となり、外には娘子関、平型関、雁門関などが要害の地が存在した。日本軍は北平・天津占領後、華北支配を企て、太原が争奪の地となった。

三十七年七月末、日本軍は三方面から華北三省を侵犯した。一方は平綏鉄道に沿って西に向かって山西・チャハル・綏遠に侵攻した。二方面は平漢鉄道に沿って南に侵犯し、河南を窺った。三方面は津浦鉄道を南下し、山東に侵犯した。かくして、華北の状況は緊迫度を増した。一〇月初頭、日本軍は正式に北支那方面軍(司令官は寺内寿一)に太原攻略を命じた。日本兵力は約一四万人で、戦車一五〇台、砲三五〇門、飛行機三〇〇機を伴っている。板垣征四郎の第五師団、関東軍チャハル派遣兵団は北路をとり、同蒲鉄道に沿って太原に向かった。他方、中国側は第二戦区の六個集団軍で、計三一師、一三個旅団、約二八万人で、飛行機三〇〇機を動員した。山西要地を確保するため、蒋介石は第一戦区の衛立煌率いる第一四集団軍の四個師団半を河北から忻口へと向かわせた。衛は前敵総指揮に就任した。この会戦は中国側が敗北し、重大な犠

牲を払ったが、日本軍も二万人余を消耗し、かつ時間を獲得した。⁽³⁸⁾

(一) 平型関戦役

八月中旬、日本軍は平綏鉄道沿線を南下し、南口、張家口を陥落させ、九月一三日に大同を占領した。二〇日前後、日本軍は涑源、靈丘などに侵入した。この時、第二戦区司令官閻錫山は戦わず、山西省北部の要地確保のため、晋綏軍、及び中央軍の一部に長城各要地での抵抗を命じた。平型関、雁門関、神池一線内での長城防衛兵力は六、七万人であった。二二日日本軍五〇〇〇人が靈丘から南進し、平型関陣地を攻撃した。高桂滋の第八四師に出撃し、かつ傅作義が予備隊を率いて応援に駆けつけ、共同作戦をおこなった。二四日日本軍は数千人を増援し、平型関の正面を攻撃した。第六集団軍が抵抗を開始し、双方とも多数の死傷者を出した。

ところで、九月中旬には、中共の著名な第一八集団軍(以下、原則として八路軍)第一一五師、第一二〇師は山西省北部の前線に到着した。そして、国民党軍に呼応して、林彪の第一一五師が平型関、賀龍の第一二〇師が雁門関に駆けつけ、日本軍の侵犯への準備を整えた。第二戦区の作戦計画に基づけば、第一一五師は平型関に侵攻する日本軍の側面、背後を攻撃する。八路軍総司令朱徳、副総司令彭徳懐の指示に基づき、第一一五師の一部は靈丘、涑源の日本軍を背後から襲撃する。第一一五師の三個連隊が雨の中、平型関の東北公路両側の山地で待ち伏せし、二五日板垣師団の一部が同地に入ると、突然襲いかかった。日本兵一〇〇〇人余を殲滅、自動車八〇台余を破壊、非常に多くの武器、物資などを鹵獲した。中国側の死傷者は五〇〇人余であった。この待伏攻撃の勝利

は日本軍の士気に大打撃を与え、逆に中国の民心、士気を鼓舞した。かくして、一〇月一日平型関戦闘は中国側の勝利に終わった。このように、その特色は第二次国共合作下での国共両軍共同の戦闘であり、その威力を十二分に發揮できた点にある。³⁹⁾

(二) 忻口防衛戦における民衆の参戦

平型関の戦闘後、日本軍の第五師団と関東軍計兵力五万人、戦車一五〇台、火炮二五〇門が板垣に率いられて忻口、太原を侵犯した。忻口は山西省北部から太原に通じる門戸で、かつ地勢厳しく、重要な戦略要地であった。中国軍は太原防衛のため、兵八万人を集結させた。第二戦区副司令長官衛立煌が第一四集團軍の四個師半を率いて河北から来て、前敵総指揮をとった。計画では、三個集團軍が五台山から寧武山に至る戦線を有利な地形に依拠して防衛する。配置は、朱徳の八路军が右翼を形成し、五台山に依拠して日本軍の前進を阻止する。同時に機を見て主力を雁門関に挺進し、日本軍に脅威を及ぼし、日本軍包囲の体勢をとる。衛立煌の第一四集團軍は中央に位置し、正面を防禦する。第六集團軍は左翼を形成し、同蒲鉄道西側で防禦し、同時に一部兵力を日本軍の背後に挺進させる。傅作義の第七集團軍は予備部隊を忻県、定襄一帯に集結し、機動力を發揮することになった。

一〇月北支那方面軍は太原攻略を開始した。日本軍は砲火、戦車、飛行機に掩護の下、まず崞県、原平を攻撃した。守備軍は白兵戦を演じ、一週間堅持したが、崞県西関を守備する一個連隊が全滅した。この後、日本軍は飛行機、重砲、戦車の掩護の下、歩兵が忻口西北に猛攻をかけた。それに対して、中国空軍、砲兵が共同作戦を実施し、かつ歩兵が突

撃し、雲中河兩岸の争奪戦を演じた。殲滅した日本兵は二万人に上り、華北戦場での殲滅記録を塗り替えたという。

八路军は抗戦すると同時に、その主力を靈丘、代県、崞県の日本軍背後に回り込ませ、交通線襲撃を繰り返した。例えば、劉伯承の第一二九師第七六九連隊は代県の飛行場を夜襲し、日本機二〇機を破壊、日本兵一〇〇人余を殲滅した。八路军が日本軍の背後に挺進したため、日本軍はかなりの兵力を背後に割かざるを得なくなった。いわば忻口正面の防衛戦を間接的に支援したことになる。そして、第一四集團軍司令官衛立煌は日本軍の正面攻撃力の弱体化を利用し、反撃した。一月初頭、娘子関陣地が急を告げ、日本軍は太原に迫った。この時、第七集團軍司令官傅作義に太原を防衛するように命令が出た。だが、一月八日太原城の北に日本軍が突入し、激烈な市街戦が展開された。傅作義は僅かに残った守備軍二〇〇〇人を率いて、西山に向けて包囲を突破した。かくして、太原が陥落した。太原陥落後、華北戦場の正規戦は基本的に終結した。⁴⁰⁾

ところで、山西省南部の遊撃戦は以下の通り。三八年春、東陽関に侵入した日本軍三、四千人、及び後続の第一〇八師団は長治占領後、臨汾を犯した。同蒲鉄道正面の日本軍は第二〇師団であり、南下し、汾河西岸を迂回した。第一〇九師団は汾陽を占領後、一部が離石を犯した。中国側は損害を減らすために、三月中旬、城鎮防衛から山地分散へと戦術を転換し、運動戦による殲滅戦を実施した。中国軍は東南北の三方面に分かれると同時に、連撃もした。四月中旬、日本軍は山西省北部の中国軍消滅を企て、主力四〇〇〇人余を集結させ、榆社、武郷、沁県を目指して進軍した。それに対して、中国軍は山西省東部、北部の回復を目指し、それぞれ配置を決定した。例えば、劉茂恩は蒲県、陳長捷は郷寧付

近、高桂滋らは沁源一帯の日本軍をそれぞれ殲滅する。趙承綬、何柱国、賀龍らは山西省西部で元来の任務を継続する。そして、各保安隊、遊撃隊は正規軍に呼応して積極的に活動をおこなう。二三日中国東路各軍はすでに日本軍の包圍攻撃計画を粉砕し、また高桂滋らは沁源を奪還した。賀龍らは山西省北部の交通を切断し、一部は太原に迫った。長治・高平・晋城の戦闘は二六日から二九日まで続き、激烈であり、日本軍の戦死者は非常に多く、大量の人馬、輜重を鹵獲した。日本軍約一万人が晋城に向けて退却したが、遊撃隊、別働隊の遮断攻撃を受けた。結局、五月一日晋城を奪還し、山西省東部の日本軍も完全に肅清された。同時期、中国軍は四日から主力を以て山西省南部の曲沃などを攻撃し、一部は山西南部の三角地帯、及び臨汾以南、同蒲鉄道沿線に散在する日本軍を掃蕩した。六月中旬、相継いで平陸など要地を回復し、日本軍残部は運城、曲沃などに退却した。そこで、中国各「困剿」部隊が積極的に包圍攻撃し、一方で臨汾以南の交通線を破壊し、日本軍の補給、増援を困難にさせた。

汾西方面では、五月中旬、蒲県の日本軍を肅清したが、汾陽、離石、中陽一帯には日本軍第一〇九師団の一部がおり、中国軍は各城内に突入した。それに対して、日本軍は毒ガスを用いたため、中国軍も攻撃に手間取っている。山西省北部では、傅作義軍が偏関、清水などを回復したが、日本軍は三方面から侵犯し、一旦偏関が占領された。そこで、六月六日傅作義軍、何柱国騎兵軍が包圍攻撃をかけ、七日晩、偏関を奪還した。⁴⁾

三七年九、一〇月第一戦区は日本軍の挟撃を受け、ついに主力を山西へと移動させた。第五三軍の呂正操連隊は日本軍に退路を断たれたが、

河北省中部に留まり、遊撃戦をおこなった。第一戦区は呂正操を第一遊撃支隊司令、李福和を第二遊撃支隊司令、孫奎元を冀西遊撃司令に任命した。軍事委員会は張蔭梧を河北民軍指揮に任命した。当時、河北省保安隊兩旅は、宋哲元総司令の第一八一師に再編され、河北省南部に移動したため、同中部の広大な地域が空白となった。だが、民衆が次々と自衛に立ちあがった。そこで、呂正操、孫奎元などの部隊がそれら民衆を吸収し、部隊自体が迅速に発展した。また、張蔭梧はしばらく陵川に留まり、幹部を訓練している。十一月第一戦区は平漢鉄道の日本軍に対して反撃し、第二戦区に呼応して戦った。第五二軍と孫奎元部隊は邯鄲、磁県を遊撃し、一旦日本軍の飛行場に攻め入り、日本軍機多数を破壊した。三八年春、張蔭梧部隊は河北省中部に深く入り、日本軍の一個連隊を撃破した。三八年二、三月日本軍第一四師団が道清線侵攻の際、第一戦区は第五三軍に陵川、林県に向けての遊撃戦を命じた。また、騎兵第四師、及び張蔭梧、孫奎元各部隊は晋察豫辺区東南の要地でも遊撃戦を実施した。さらに第九五師に黄河を渡河しての遊撃戦を命じ、さらに補給物資の太行山地区への運搬を命じた。その後も、遊撃戦は五年以上に続けられることになる。⁵⁾ また、山西省では各部隊が遊撃戦を拡大し、敵に比して中国側の死傷者は極めて少なかった

ところで、日本軍は河北省北部に侵入後、連日、左右、背後からの猛攻を受けている。そうした中で、日本軍は占領地域で暴虐行為を働き、広範な民衆の憤怒をかった。その結果、河南省北部の一〇余県では次々と動員委員会を成立させ、武装した民衆三〇万人以上がすでに前線で参戦している。同様に河北省中部、西部、北部の各地民衆も日本軍の蹂躪に耐えきれず、反抗に立ち上がった。こうした背景下で、中国軍は力を

得て数多くの城鎮を回復したが、当地の民衆は喜び、「義旗」を掲げた。このように、呼応者は急速に増大したのである。保定地区各県の義勇軍六〇〇〇人余は武装力も整っている。このように、民衆の呼応者が急増している。冀北某県の民団、平漢鉄道沿線の義勇軍は二〇〇〇人余で、相互に呼応し、日本軍に脅威を与えた。その武器の多くは遊撃戦中に日本軍から獲得したものである。⁴³⁾

平漢鉄道の日本軍は中国軍の挟撃を受け、安陽から退却した。当地民衆は日本軍の蹂躪を受けた結果、次々と義軍を組織した。孫、劉、張、龍各義軍の銃は一〇〇丁から一〇〇〇丁と異なるが、某総司令の命を受けてそれぞれ遊撃戦を開始した。日本軍は再び安陽を侵犯し、鉄道沿線、及び西郷で強姦、虐殺をおこなった。その結果、民衆は国民政府軍に協力して日本軍と戦うようになった。例えば、農民四人は日本軍の暴行に憤慨し、日本兵一〇余人を殺害したという。また、中国軍某部隊が河北省磁県に進軍すると、その近くの河南省林県、武安などの戦区民衆は自発的に武装防衛活動を開始し、安陽民団壯丁隊を組織し、積極的に活動した。彭徳でも遊撃隊を組織する者が非常に多い。彭志鴻は遊撃隊三〇〇人を率いて臨漳県城を回復した。⁴⁴⁾このように、日本軍の残虐行為は民衆を畏縮させるところか、普遍的な怒りを巻き起こし、反日の実際行動に立ち上る重大な契機となった。そして、それら民衆は国共両軍の戦闘をも支援したのである。

六 徐州会戦における台児莊戦闘の位置

徐州は江蘇省西北部にあり、津浦・隴海両鉄道の中核という重要都市

中国国民政府・国民党の正規戦とゲリラ戦（菊池）

で、かつ山東・河南・安徽・江蘇四省の戦略要地であった。日本軍は首都南京を占領後、津浦鉄道を打通し、南北戦場を繋げようとした。そこで、中国軍事当局は徐州を全力で防衛することを決定した。そして、第五戦区司令長官の李宗仁が徐州で作戦指揮を採った。かくして、徐州中心の広大な地域で、大規模な会戦を展開されたのである。徐州会戦（1937.12-38.5）は津浦鉄道沿線の【初期防衛戦】、【台児莊会戦の勝利】、そして、【徐州包圍突破戦】の三段階に分かれ、実に五ヵ月余の戦闘になった。

（一）初期防衛戦

日本軍約八万人が津浦鉄道の南区間を主に攻撃し、南北に分かれて徐州へと進軍した。中国守備軍は六個集団軍、二個軍団である。この時期、日本軍には南京から増援軍、及び武器が次々と補給されていた。淮河北岸で、日本軍と中国軍は激戦となり、各部の守備軍は反復して数十回突撃し、中国空軍も津浦鉄道沿線の日本軍を爆撃した。二月六日廖磊の第二一集団軍の一部は定遠に向けて反攻し、張自忠の第五九軍が于学忠の第五一軍から淮河北岸の各陣地を引き継いだ。日本軍の猛攻を耐えたが、二七日第五九軍は山東省臨沂へと移動した。この時、周祖晃の第七軍が定遠などに反攻し、大規模な遊撃戦を発動した。結局、大部分の日本軍は淮河南岸に撤退し、両軍は淮河を挟んで対峙した。

ところで、津浦鉄道北区間の防衛戦は元來、第三集団軍総司令の韓復榘（山東省主席）が指揮するはずであった。ところが、三七年一二月韓は第二〇師だけを済南に残し、兵力保存のため、本隊は泰安に向かった。その結果、日本軍は済南を簡単に占領した。三八年一月一日日本軍

の第一〇師団は泰安に進駐し、第三九連隊は肥城を攻略した。五日韓は濟寧を放棄し、曹県、单県一帯に撤退させた。その結果、北区間が空白となり、日本軍は抵抗も受けずに、線路沿いに長距離を直線的に進軍してきた。最高軍法会議（審判長何応欽）は、韓に「上官の命令に従わず退却した」罪状で戦時軍法違反と見なした。そして、処刑判決後、即刻、武昌陸軍監獄内で銃殺された。遺体は家族に引き取られた。後任には、韓集団軍所属の第一二軍長孫桐萱が就任した。李宗仁の命を受けて、二月一日孫桐萱の二二師の一部が濟寧に突入した。だが、日本軍には大量増援があり、運河西岸に撤退せざる得なくなった。北区間の泰安は陥落し、中国軍事当局は緊急に孫震の第二二集團軍に、孫桐萱部隊の作戦支援を命じた。一カ月の戦闘で、日本軍と対峙する形勢となった。⁴⁵⁾

(二) 台兒莊戦闘の中国勝利 (1938.3-4)

北平、南京陥落後、華北、華中の日本軍は津浦鉄道に沿って侵攻し、江蘇省徐州の情勢が緊迫した。日本軍第一〇師団は一挙に山東省南部に位置する嶧県の台兒莊を攻略し、徐州侵攻の拠点とすることを企図したのである。台兒莊は徐州の門戸に当たり、水陸交通の便よく、一つの重要な軍事拠点であった。三八年二月武漢で蒋介石は徐州戦の配置を決め、安徽省主席李宗仁に抗戦を命ずると同時に、中共の彭徳懐に津浦鉄道への八路军の派兵と支援を要請した。このように、第二次国共合作の有効性がいかなく発揮されたといえる。三月二三日、日本軍約四万人が飛行機の援護を受けながら台兒莊に猛攻をかけた。李宗仁の命を受けた孫連仲（元馮玉祥の西北軍）の三個師団が迎撃した。三、四月にかけて磯谷師団は一〇日間にわたる台兒莊争奪の激戦を演じた。日本軍は優

勢な砲兵と機械化部隊（野戦砲六〇〜七〇門、重砲一〇余門、戦車三〇〜四〇台）を用いて猛攻した。日本軍は三昼夜の猛攻をかけ、城内に突入、孫連仲部隊の七割が死傷、三分の二が占拠された。だが、師長池峰城に率いられる第三二師は白兵戦を繰り返して、台兒莊城の四分の一を死守した。この時、中共の朱徳と彭徳懐が有力な支隊を派遣し、津浦鉄道の北区間を襲撃し、日本軍の補給路を断った。そして、三一日には、台兒莊の日本軍を完全に包囲した。日本軍は台兒莊正面が危険な状態に陥つたため、日本軍の沂州支隊は臨沂攻撃を放棄、移動し、湯軍団の側面を攻撃し、救援しようとした。湯軍団はすぐに閔麟徴軍を差し向け、台兒莊の日本軍に包囲攻撃をかけ、三万人余を殲滅した。残兵一万人余は潰走し、中国軍が追撃した。その時、中国側の狙撃兵団が臨城、棗莊で日本軍の退路を断った。かくして、四月日本軍は兵員、武器弾薬、食糧が供給されなくなり、日本軍は撤退を余儀なくされた。⁴⁶⁾

日本軍の精銳二個師団を打ち破るという戦果を収め、その津浦鉄道南北への侵犯を阻止した。三月二三日台兒莊会戦が開始された。日本軍は嶧県から台棗支線に沿って台兒莊を侵犯した時、孫集團軍の師長池峰城は第一八六連隊を率いて台兒莊を守り、激烈な戦闘となった。蒋介石は台兒莊、徐州の死守を命じ、失敗すれば、戦区司令長官、旅長以上の長官を厳罰に処すと発表した。そのため、第五戦区司令長官の李宗仁は、一方で第二集團軍の台兒莊死守を命じ、他方で、湯恩伯第二〇軍団に台兒莊の日本軍左翼への側撃を命じた。日本軍は付近の飛行場に退却したが、中国軍の敢死隊が夜襲し、日本軍機五機、石油タンク、弾薬庫を破壊した。その上、大汶口から兗州間のレールをすべて破壊した。南方面の第五軍は津浦鉄道を裁断し、兗州・臨城間の鉄道を破壊し、日

本軍左翼陣地への増援ルートを断絶させた。三一日本軍五〇〇人が台兒莊北門に突入し、第三一師と市街戦を演じた。また、日本軍は台兒莊東南門外から突入、催涙弾も用い、市街地の大部分を占領、中国軍死傷者が兵士の七、八割に上った。だが、西北は相変わらず第三一師が死守しており、日本軍は重砲、戦車を持ち出し、猛攻をかけたが、池峰城は家屋を利用して抵抗した。かつ敢死隊数百人を組織し、異常とも見える反撃に出た。例えば、青龍刀を持ち、日本兵を襲撃したのである。その勢いに乗って日本軍が占拠していた四分の三の市街地を奪還した。四月六日晚、中国軍は全線反攻を開始した。湯軍団は外線包围、孫集団軍は正面を担当した。中国軍は重砲で日本軍の火薬庫を破壊し、台兒莊内の残兵をすべて粛清した。七日払暁、劉家湖などの日本兵を殲滅し、残部は嶧東方面に逃走し、中国軍は全線で追撃した。かくして、台兒莊会戦は大勝利に終わった。

この戦闘で、中国軍は日本軍の精鋭である第五、第一〇両師団の主力を打ち破り、日本軍「二万人余」を殲滅し、大量の武器と装備を鹵獲した。勝利のニュースが伝わり、全国民衆は沸き立ち、その勝利を祝った。全国各界、海外華僑、及び世界各国人士も祝賀電報を次々と寄せた。武漢三鎮と広州の多くの民衆も盛大な集会、デモを挙行した。台兒莊の勝利は、国民党が抗戦以来、獲得した最大の勝利であり、「祖国防衛」、「抗戦勝利」の精神を鼓舞し、その信念を固めさせたという。ところで、勝利には、台兒莊周辺の広範な民衆が大きな役割を果たし、自発的に中国軍隊に情報を提供し、負傷兵を救護した。なかには、自ら武器をとって立ち上がり、中国軍を支援した。⁽⁴⁸⁾このように、台兒莊の戦闘は抗戦初期の「正面戦場」での中国側の勝利という位置づけが与えられ、

中国国民政府・国民党の正規戦とゲリラ戦（菊池）

日本軍の台兒莊を拠点に徐州に突き進むという計画を打破したとされる。

白崇禧によれば、台兒莊での大勝利の要因は孫連仲総司令の部隊が台兒莊を堅守し、湯恩伯総司令の部隊が側面から運動戦を実施し、軍長曹福林らが遊撃戦を実施し、四方から敵を襲撃し、かつ交通を破壊、運輸を切断した。かくして、敵は砲弾、ガソリン不足となり、撤退した。このように、遊撃戦、運動戦、陣地戦の三つを配合した結果、もたらされた勝利と見なした。

台兒莊の大勝利により、「恐日病」、「日本軍には勝てない」という神話が払拭された。ただ、この勝利に酔いしれた国民党内には日本軍に「速勝できる」とする根拠のない楽観論まで生まれた。⁽⁴⁹⁾だが、これら一連の戦闘で、国民政府は日本の「三カ月で中国を滅亡させる」という迷夢を粉碎したのである。

(三) 徐州陥落と中国軍の包围突破

徐州会戦は第三段階に入った。日本軍は台兒莊での惨敗後、日本軍は本来の目的である徐州作戦に向けて平津、山西、江蘇等から一三個師団、三〇余万人を結集し、五月徐州への侵攻を開始した。板垣師団の主力は西に向かい、嶧東、棗莊、臨城一帯の磯谷師団の残部と合流した。四月中旬以降、日本軍は北平、天津、山西、綏遠、江蘇、安徽各戦場から、各種重武器で装備させた三〇万人を徐州に移動させ、六方面から徐州大包围をかけた。国民政府軍事委員会も台兒莊戦闘の勝利後、各戦場から大量の軍隊を集結させ、その数は四五万人に上った。四月中旬、山東省南部の日本軍が戦端を開き、五月、津浦鉄道南区間の日本軍各部

隊は北へと侵犯を開始した。五月一〇日日本軍第九師団は板橋に侵入、第一三師団は前後して龍元、蒙城を占領し、中国第二一集團軍の一部と決戦となった。九日、日本軍は砲火、飛行機の掩護下に、歩兵と戦車一〇余台が蒙城城内に突入した。第四八軍第一七三師は奮戦したが、二〇〇〇余の将兵が全滅した。ただし、日本軍も死傷者一〇〇〇〇人余を出した。第五戦区では、馮治安の第七七軍を徐州から宿県に移動させ、日本軍の北進を阻止した。五月七日日本軍は塩城から北進し、阜寧を攻略した。蚌埠の日本軍約三個師団は宿県を攻略後、津浦鉄道西側から徐州に迫り、その勢いを止めることができず、徐州以南の防衛線は全く役に立たなかった。また、津浦鉄道北区间の日本軍も次第に徐州に迫った。

漢口開催の最高軍事会議で精銳軍を保存のため、徐州放棄を決定せざるを得なかった。第二四集團軍が蘇北に留まり、第六九軍と海軍陸戦隊が山東省南部・中部を堅持する外、第五戦区主力は西に向けて転移し、李宗仁長官司司令部、湯恩伯、孫連仲など各部隊は五方面に分けて包囲を突破した。五月下旬、徐州の各参戦部隊は安徽省西部、河南省南部の地区に安全に撤退することができた。かくして、一九日徐州は陥落し、徐州会戦全体としては中国側の敗戦に終わった。とはいえ、徐州会戦は抗戦以来、最も長期な戦闘の一つで、日中双方が投入した兵力はそれぞれ数十万人に達した。中国軍は、全将兵が大きな犠牲を払いながらも、日本軍数万人を殲滅した。特に台児莊の勝利は人心を奮起させた。中国軍は劣勢な装備で、日本軍の精銳部隊と五ヵ月余にわたり戦い、津浦鉄道を打通させず、中国軍事当局が武漢大会戦を準備する十分な時間を創り出した。⁽²¹⁾

ここで遊撃戦について見ておきたい。三八年四、五月徐州会戦の時、

第五戦区第二四集團軍韓德勤部隊は蘇北、安徽省東部を保持し、通海公路に沿って北進する日本軍を阻止し、同時に津浦鉄道南区间で遊撃戦を実施した。そして、第五戦区主力の側面と背後の脅威を取り除き、台児莊戦闘での勝利に貢献した。四月下旬、蒋介石は第六九軍に臨沂への挺進を命じ、日本軍後方を襲撃させ、徐州会戦敗戦後も山東省南部で遊撃戦を継続した。続けて蒋介石は第二四集團軍の第五七軍を蘇北から山東省南部へと移動させ、当地の遊撃兵力を強化した。沈鴻烈が山東省主席に就任すると、各区行政専員に地方部隊を指導させ、「抗敵自衛」を実施させた結果、遊撃戦は山東省全域に広がった。⁽²²⁾

ところで、山東省では、その後も遊撃戦が活発に展開された。『中央日報』によれば、三九年三月一五日夜北に上する車輛二三台に日本兵を満載し、新郷から出発し、塘崗付近に到着した時、地雷が爆発し、日本兵の死傷者が散らばっている。同時期、日本軍占領の済南を襲撃し、日本兵一〇〇〇人余を殺害した。また、敢死隊が済南の商店街に突入、憲兵数人を殺害、犠牲団が傀儡統稅局に乱入し、漢奸数人を殺害している。⁽²³⁾ また、五月一六日には、中国軍の一部隊が済南市区にある発電所の機器すべてを破壊したため、全市が暗闇となった。そうした中で、各所で火を放ったため、日本軍はパニック状態に陥った。さらに山東省の正規軍は遊撃部隊と協力し、済南、泰安、及び膠済鉄道の沿線各地に出撃した。一七日某部隊は日本軍が設けた三重の有刺鉄線の鉄条網を突破し、日本兵一〇〇〇人余を殺害した。その後、日本軍が大挙して逆襲してきたため、中国軍は山地に移動し、戦闘を続けた。中国軍は苦戦したが、援軍が来て対峙状態となった。泰安、明水でも鉄道を破壊した。⁽²⁴⁾

七 武漢大会戦——日本軍攻勢・中国軍防禦の頂点——

一九三八年三月国民党臨時全国代表大会が武漢で開催され、「抗戦建国綱領」を採択し、外交、軍事、政治、経済、民衆運動、教育各分野の綱領を制定した。「軍事」では、軍隊の政治訓練とともに、「全国壮丁を訓練し、民衆武力を充実させ、抗戦部隊を補充する」とし、「各地武装人民を指導、援助し、各戦区司令長官の指揮の下、正式軍隊と配合して作戦する。以て郷土保衛、外侮防禦の効能を充分に發揮し、並びに敵後方で普遍的な遊撃戦を發動し、敵の兵力を破壊、牽制する」。傷亡兵士を慰撫、抗戦人員の家族を優待し、以て士気を高め、全国動員のため鼓舞する⁽⁵⁵⁾とある。すなわち、中国全力量の総動員体制と「全民抗戦」の確立を目指し、民衆のウエイトが圧倒的に高まると同時に、遊撃戦がこれまで以上に重視された。

徐州会戦後、すぐに武漢大会戦（1938.6.12-10.25）が開始された。会戦は、日本軍の安慶上陸から中国軍の武漢撤退までの約四ヵ月半である。戦場は武漢周辺の長江南北両岸で展開され、安徽、河南、江西、湖北四省の広大な地区へと拡大した。蒋介石は武漢で自ら指揮を採り、第九戦区（司令長官陳誠）、第五戦区（司令長官李宗仁）が連合実施した。投入兵力数は最も多く、犠牲も最も多かった。三七年十一月南京が包囲された時、国民政府は重慶に遷都したが、軍事委員会は武漢へと移った。こうして、武漢が実質的に中国軍事・政治・経済の中心となり、抗戦継続の核心となった。日本政府は徐州会戦中、武漢占領の作戦計画を練った。この時も、その戦略は「速戦速決」方針で、武漢占領に

中国国民政府・国民党の正規戦とゲリラ戦（菊池）

より中国の士気・民心に打撃を加え、国民政府を屈服させ、速やかに戦局を終結させることを目指したのである。かくして、七月中旬、中支那方面軍は新配置を決定し、司令官に畑俊六大将が就任した。そして、第二軍所属の四個師団は安徽省合肥付近に集結し、平漢鉄道を切断し、武漢の北に迂回する。第一軍所属の五個師団を九江付近に集結し、粵漢鉄道を切断し、武漢の南に回り込む。日本軍主力は長江以南の地区に配置し、武漢占領の目的を達成する計画であった。日本軍は最終的には一、二個師団、艦艇一、二〇隻余、飛行機五〇〇機余、計三十五万人に達した。

これに対して、国民政府軍事委員会は指導方針を發布し、長江以北の第五戦区、以南の第九戦区が連合で武漢防衛作戦をおこなうこととした。重点は外線にあり、機動戦によって逐次抵抗し、日本軍を消耗させ、四、六ヵ月の戦いに引き延ばす方針をとった。防禦重点を長江以南とし、同時に南昌、九江、大別山東麓から北に伸びる線を第一防禦地帯とし、その以東を遊撃区とした。萍郷、瑞昌から武勝関に至る一線を第二防禦地帯、あるいは「決戦地帯」と称した。具体的配置は、第九戦区第一兵団（司令薛岳）が南昌から德安付近に至る一線、第二兵団（司令張発奎）が德庵から九江に至る一線、第五戦区第三兵団（司令孫連仲）・第四兵団（司令李品仙）が長江以北、大別山東麓の一線をそれぞれ防衛する。そして、武漢衛戍部隊（司令陳誠、後に羅卓英）が武漢の中心陣地を担当した。会戦初期には、四個兵団所属の五個集團軍で、計三〇個師、飛行機一〇〇機余であったが、戦役中、絶えず増大し、最終的には一四個集團軍、計一二九個師、艦艇四〇隻余、飛行機一〇〇〇機余で、一〇万人に上った。その上、ソ連の援華志願飛行大隊（爆撃大隊と戦闘大隊）が参加した。武漢防衛戦は長江南岸・北岸で同時に展開された。

こうして、大小戦闘が数百回に上った。

【長江南岸第九戦区の戦況】

六、七月日本軍により馬当、湖口両要塞が陥落した。七月二二日、日本軍は九江に迫り、長江以南における武漢侵攻の拠点確保を目指した。二六日中国守備軍は九江を放棄した。李漢魂部隊は廬山、及び南潯線に退却し、有利な地形を利用して抵抗し、日本軍第一〇六師団と一ヵ月対峙した。日本軍は数回強攻したが、死傷者が多く、第一四五連隊は全滅した。八月八日日本軍の一部は瑞昌東北の港口から上陸し、張発奎第二兵団の第一二軍と激戦となった。長江の日本艦船、及び飛行機が馬頭鎮、富池口の両要塞を猛爆した。これに湯恩伯の第三二集團軍も激しく抵抗した。その結果、日本軍は大量の毒ガスを放ったが、結局のところ退却せざるを得なかった。他方、湯の集團軍も火力が不十分なこともあり、九月一四、一五日両要塞は前後して陥落した。日本軍は粵漢線切断を企図し、さらに武漢へと迫った。中国軍は抵抗しながら武寧、通城、岳州一線に退いた。江南の中国第一兵団、第二兵団は廬山中心の山岳地帯で、日本軍に反復して突撃した。中国側の犠牲は重かったが、日本軍も消耗し、その進軍を遅らせた。

【長江以北の第五戦区戦況】

長江北岸に侵犯した日本軍第六師団は太湖占領後、中国軍に数回の反撃を受け、前進を阻まれた。七月下旬、日本軍は海軍の掩護を受け、第三師団が小池口に上陸し、第六師団と共同で二方面から猛攻をかけ、黄梅、宿松を占領した。その後、廖磊の第二一集團軍が太湖、宿松を奪還した。日本軍は田家鎮要塞を攻撃した。また、中国軍は日本軍の側面、背後から猛攻をかけ、九月下旬までの激戦となり、日本軍の死傷者は甚

だ多かった。九月二八日武穴から西に進んだ日本軍は飛行機九〇機、大砲一〇〇余門が激しく砲撃し、田家鎮陣地は全壊した。守備軍は潰滅したが、日本軍の被害も大きく、六、七千人が戦死した。一〇月二五日日本軍は漢口の側面に背後に迫った。

日本軍約五万人が合肥から大別山北麓に向かった。八月二八日日本軍は三方面に分かれて、安徽省六安、霍山を侵犯し、于学忠、馮治安の第七七軍と激戦後、六安、霍山を占領した。続いて日本軍第一三師団は西を侵犯し、富金山陣地を侵攻した。この後、日本軍は二方面に分かれた。一方は、第一三師団、及び第一〇師団瀨谷支隊で、潢川を攻撃したのに対し、張自忠の第五九軍、孫連仲の第二集團軍が痛撃を加えた。日本軍は羅山を占領し、九月下旬、胡宗南第一七軍団が信陽以東で激戦となり、日本軍五〇〇〇人余を殺害した。だが、日本軍第三師団が増援にきたため、一〇月一二日胡宗南軍の被害が大きく、信陽を放棄した。日本軍は転じて平漢鉄道を南下し、漢口の北に迫った。ここに至り、武漢周囲の要塞、陣地はすべて日本軍に占領され、武漢は包囲された形となった。そこで、蒋介石は撤退を命じ、二五日武漢は陥落した。

このように、日本軍は一二個師団以上の兵力を集めたが、死傷者は二二〇万人に達した。国民政府も動員可能なすべての軍隊を召集し、死傷者は一四〇万人以上に上った。とはいえ、中国軍は広範な将兵が奮闘し、特に中国空軍が呼応し、日本艦艇の西への侵犯を阻止し、昼夜長江の日本艦艇を空爆、二〇隻を撃沈、一一九隻に被害を与えた。その上、ソ連援華志願航空大隊が参戦し、中国軍民の抗戦を鼓舞した。中国は武漢大会戦に敗北したが、日本軍はかなり消耗し、かつ四ヵ月の時間を勝ち取った。かくして、日本軍は武漢を占領したが、「速戦速決」に



図4 武漢陥落後の勢力図（1939年初頭）

出典：『中国抗日戦争史地図集』中国地図出版社、1995年、150頁から作成。

武漢大会戦期間に、第三区では、工兵、歩兵と山砲、戦車を組み合わせ、数個の遊撃砲兵隊を組織した。安徽省南部の長江沿岸に挺進させ、敵艦艇を襲撃し、その航運を妨害した。同時に日本第一一六師団を牽制した。確かに日本軍三〇個師団は内陸の重要都市を占領したが、中国遊撃隊は広大な地域を保有したままで、日本軍を包囲する形勢であった。このように、日本軍が占領したはずの武漢とその周辺も安定

完全に破綻し、戦略的侵攻はここが頂点で、これ以降、日中両軍は戦略的対峙段階に入った。毛沢東も、盧溝橋事件から武漢陥落までの期間が、国民党政府が対日作戦にかなり努力した時期と認めている⁽⁵⁶⁾。では、ここで津浦、平漢両鉄道沿線での遊撃戦を見ておきたい。武漢大会戦の際、日本軍の少数部隊が津浦鉄道沿線の要所を保持していた。そこで、津浦北区間の石友三が地方遊撃隊と配合し、南区間方面の韓徳勤部隊が分かれて、日本軍後方を騷擾し、しばしば重大な打撃を与えた。平漢鉄道方面では日本軍機が黄河の堤防を爆撃し、決壊させた。河南省東部の日本軍第一六師団は長江方面、第一四師団の主力が道清鉄道沿線に移動した。この時、中国軍の有力部隊が前後して湖南、湖北、江西方面に移動して武漢大会戦に参戦した。河南省の黄河南北の日本軍兵力は多くはなかったが、中国軍の有力部隊が他所に移動していたため、大規模な行動はとれなかった。ただし一方で山西省南部で中共軍に呼応して戦闘し、他方で遊撃戦を繰り広げた。日本軍は河南、山東両省の少数の拠点を占領した外は、発展できず、かつ絶えず、あらゆる所で遊撃隊の攻撃を受けた⁽⁵⁷⁾。

そこで、津浦北区間の石友三が地方遊撃隊と配合し、南区間方面の韓徳

勤部隊が分かれて、日本軍後方を騷擾し、しばしば重大な打撃を与えた。平漢鉄道方面では日本軍機が黄河の堤防を爆撃し、決壊させた。河南省東部の日本軍第一六師団は長江方面、第一四師団の主力が道清鉄道沿線に移動した。この時、中国軍の有力部隊が前後して湖南、湖北、江西方面に移動して武漢大会戦に参戦した。河南省の黄河南北の日本軍兵力は多くはなかったが、中国軍の有力部隊が他所に移動していたため、大規模な行動はとれなかった。ただし一方で山西省南部で中共軍に呼応して戦闘し、他方で遊撃戦を繰り広げた。日本軍は河南、山東両省の少数の拠点を占領した外は、発展できず、かつ絶えず、あらゆる所で遊撃隊の攻撃を受けた⁽⁵⁷⁾。

せず、攻撃された。換言すれば、日本軍は広大な平原の「点と線」を占領し、華北では太原、安陽など、華中では岳陽、廈門、杭州などを占領した。これに伴い戦場は拡大した。その結果、日本は傀儡組織を設立し、「以戦養戦」をスローガンに中国の物資、人材、兵力を利用して侵略を継続しようとした。中国軍は、日本軍が優位な平原での決戦を避けた。そして、一方で有力部隊に正面の要所を守らせ、他方で日本軍の補給線が伸びきったことに乗じて、中国正規軍と地方部隊を配合し、日本軍の背後で広範な遊撃戦を発動した。それにより日本軍後方を前線に変え、その交通線、封鎖線を切断して日本軍の拠点を孤立化させた⁽⁵⁸⁾。

武漢陥落後の勢力分布は図4の通りである。北方、及び沿岸部からの日本軍の侵攻により、日本軍の占領地域は拡大し続けてきたが、これ以降、対峙段階に入り、その後、国民党軍が押し戻し始めるのである。また、日本軍占領地域内には多数の中共地区（抗日根拠地）が入り込んでおり、日本軍の占領支配は不安定で、いつ反攻を受けても不思議ではない状況であった。

軍事委員会は各戦区作戦要項を策定し、以下の原則を決めた。すなわち、戦区司令長官の指揮下に、戦区内に若干の遊撃区を定める。そして、遊撃区毎に若干の遊撃基幹部隊を配置する。また、一、二個の野戦兵団（一兵団を三〜五個師で構成）を組織し、交通の重点地点に配置する。当初、遊撃区は第一、第二、第三、第五各戦区に設けられたが、戦線拡大に伴い、第四、第七各戦区などにも設けられた。そして、各遊撃区では全面的な遊撃戦を発動した。こうした敵後方での遊撃戦は日本敗戦まで続行された⁽⁵⁹⁾。このように、日本軍を絶えず消耗させ、疲弊させ、小勝を積み重ねて大勝に結びつけたのである。

おわりに

以上のことから以下の結論を導き出せる。

第一に、蒋介石は圧倒的に優位な日本軍に対抗するため、持久抗戦を前提に正規戦よりもむしろ遊撃戦を重視した。ここで押さえるべきことは、国民党軍が主に担う正面戦場は単純に正規戦とはいええず、実は正規戦に遊撃戦を配合していたのである。その上、蔣は、遊撃戦を正規戦こそおこなえと、民衆の組織したものは「別働隊」との位置づけを与えた。したがって、正規軍による「第五縦隊戦」は遊撃戦の戦術を駆使するが、これに高い評価を与えた。換言すれば、日本軍に対して中国は国共にかかわらず実質的に遊撃戦で立ち向かったといえるのである。いわば遊撃戦は武器が劣勢の場合、強敵の侵略に対して自国内という地の利を生かし、全民武装で持久抗戦をおこなう最も適切な戦争方式であったのである。なお、結果的に日本軍は中国に対しては強力な近代兵器という軍事力で屈服させようとしながら、他方、アメリカに対して「神風」などを包括する精神力で戦うというダブルスタンダードをとったことになる。

第二に、国民政府の戦略は「空間を時間に換え」、「持久消耗戦」を実施し、日本軍の「速戦速決」政策を粉砕した。抗戦初期、確かに日本軍が武力面で圧倒的に優勢であった。そこで、可能な限り正規戦を避けた。蒋介石の指示で、各戦区では遊撃部隊を組織した。かくして、遊撃戦を以て正規戦を補強し、日本軍を牽制した。そして、遊撃隊幹部を訓練し、同時に一部の正規軍、地方軍を派遣して遊撃戦を担当させた。各

戦区では、民衆を指導し、日本軍を消耗させた。かくして、日本軍後方の交通、通信を切断、倉庫、駅などを破壊し、日本軍への補給を断絶させた。日本軍占領地域を「点と線」と見なし、その空白部分で遊撃戦を發動したのである。持続的な襲撃と交通・連絡網の断絶により、日本軍の機動力、運搬力、及び近代兵器の威力を減退させ、日本軍を弱体化できると認識されていたからである。

第三に、蔣は民衆に対して「愛護」し、戦争に協力させるといふ受動的な存在とみなし、中共に比して、その自発性、力量を十二分に発揮させたとはいえない。民衆武装化は政権党にとって両刃の剣であり、国民党内にはその鋒先が向けられることを恐れる潜在意識があったことは疑い得ない。だが、同時に民衆の重要な役割を間違いなく認識しており、「国民組織戦」のごとく積極的な抗日をも求めてもいた。日本軍の残虐行為に憤った民衆が積極的に民兵、さらに遊撃隊員となり、人材が枯渇することはなかった。

第四に、各主要会戦・戦闘の特色を見ると、①盧溝橋事件ではまだ外交交渉もするが、日本軍は背後で軍事的圧力を強めていた。結局、中国軍も立ち上がり、全面戦争に突入していくことになる。この際、従来考えられてきた「銃弾一発」問題などよりも、むしろ日本軍にとっての豊台の位置が重要であり、盧溝橋などではなく、むしろ北平城略に主眼があった。②第二次上海事変では、日本軍の優位な武力に押し切られながらも、中国軍も機動戦、遊撃戦を駆使して初めて頑強に抵抗した。こうした状況下で第二次国共合作・抗日民族統一戦線が成立する。また、ドイツ顧問団、ドイツ製武器も威力を発揮し、日本軍の前進を遅滞させ、勝利まで三カ月を要することになる。③首都南京の攻防戦は南京

中国国民党政府・国民党の正規戦とゲリラ戦(菊池)

「外衛線」防衛は役に立たず、「内衛線」防衛の南京城外での戦闘は、第二次上海事変からの撤退部隊で、戦闘力が弱く、日本軍の敵ではなかった。かくして、唐生智部隊は逃亡し、日本軍は南京城には「無血入城」でき、かつ城内では抵抗に遭うこともなかった。ただし、日本勝利・中国屈服を意味するはずであったこの攻防戦後、中国は政府を武漢、さらに重慶に移して抗戦をおこなうことを明確にしたことに意義がある。④太原会戦、徐州会戦とも、中国側が敗北することになるが、抗日民族統一戦線の成立は、国共両軍合作による抗日戦闘を可能にし、部分的とはいえ、中国軍は平型関、台兒莊両戦闘で勝利を収めることができた。この勝利は中国軍兵士、中国民衆を鼓舞した。中共軍の参戦、遊撃戦、及び民衆の支援と参戦が日本軍に局部的とはいえ、大きな打撃を与えたといえよう。⑤武漢大会戦は日本軍の攻勢がここまでで、これ以降、日中の対峙段階に突入したといえる。日中双方とも大量動員をかけ、日本軍三五万人、中国軍一〇万人に上った。中国軍側には、日本の脅威が増大していくことを恐れるソ連が援華志願飛行大隊を送り込んだ。「建国抗戦綱領」も採択され、「全民抗戦」はさらに強化された。その上、日本は武漢大会戦に勝利したとはいえ、占領地域の内側に火薬庫としての多くの抗日根拠地を抱え込み、「点と線」の防衛に汲々とすることになる。かくして、敗戦しか日本軍にとって抜け出ることのできない泥沼戦争へと突入した。

註

(一) 戦後、日本での中国政治(軍事)史研究は人民共和国を成立させた中国共産党(以下、中共と略称)が脚光を浴び、その党史、とりわけ毛沢東を中核とする勸善懲惡的な路線闘争史の解明に重点が置かれた。また、中国

革命史も主に階級闘争史観から革命を成功に導いたとされる農民運動、そして労働運動の実態、意義と限界が論じられ、時期的には長く三〇年代中期までに留まっていた。このように、中国国内問題が主に論じられ、対外矛盾である三七年からの抗日戦争は後景に退き、その本格的な研究は決定的に遅れたのである。こうした経緯から、盧溝橋事件（安井三吉「盧溝橋事件」研文出版、一九九三年など）、南京事件（笠原十九司「南京難民区の百日」岩波現代文庫、二〇〇五年など多数）など特定問題は論じられても、日本の中国史研究者側からの戦争通史は、石島紀之「中国抗日戦争史」（青木書店、一九八四年）しかない。なお、当該時期の重慶国民政府の再評価はすでに戦時経済（拙稿「重慶政権の戦時経済建設」『歴史学研究所別冊特集——地域と民衆——』青木書店、一九八一年など）から開始されている。その後、軍事史研究の遅れの克服も主張（姫田光義「中華民国軍事史研究序説」『民国前期中国と東アジアの変動』中央大学出版社、一九九九年）された。最近、石島紀之・久保亨編『重慶国民政府史の研究』（東京大学出版会、二〇〇四年）、『民国後期中国国民党政権の研究』（中央大学出版社、二〇〇五年）が相継いで刊行されて多面的なアプローチがおこなわれ、研究に一定程度の進展を見た。ただ軍事関係では、後者に笠原十九司「国民政府軍の構造と作戦——上海・南京戦を事例に——」などが所収されているだけで、残念ながら遊撃戦に関する専論はない。このように、日本では日中戦争史研究は主に日本語史料を駆使した日本史研究者の独壇場の感があった。

ところで、中国では、抗日戦争勝利をもたらした中共の評価は相変わらず高く、かつ日本の教科書問題ともからまり抗日戦争史研究は急増している。『抗日戦争研究』という専門誌も刊行された。台湾との第三次国共合作をにらみ、国民党の「正面戦場」の意義を評価する論調も目立つ（『抗日戦争時期国民党正面戦場重要戦役紹介』四川人民出版社、一九八五年など）。ただ軍近代化と国防力増強を急ぐ中国にとって、遊撃戦は回顧を喚起するものであっても、歴史学的に究明する主要テーマではない。もちろん日中双方で遊撃戦は国民革命軍八路軍（第十八集團軍）、新四軍（新編第四軍）などとの関連で論及されてきた。例えば、①『抗日戦争時期的八路軍和新四軍』人民出版社、一九五三年から、②六戸寛等『中国八路軍、

新四軍史』河出書房新社、一九八九年、③岳思平『鏖兵華北——震驚中外的百團大戰——』一九九五年などがあり、最近では、④三好章『摩擦と合作——新四軍1937～1941——』創土社、二〇〇三年が出版されている。ただし、これらは八路軍、新四軍に焦点を合わせたもので、国民党の駆使する遊撃戦に関してはほとんど注意を払われてこなかった。

- (2) 蒋介石「以事实証明敵国必敗及我国必勝」一九三九年一月二二日、同「第二次南嶽軍事會議訓詞」同一〇月二九日、『蔣總統思想言論集』卷一五、中央文物出版社（台北）、一九六六年、一八、二三、二〇二頁。なお、今井駿「中国革命と対日抗戦」（汲古書院、一九九七年）が蒋介石の「持久戦論者」としての側面を先駆的に指摘した。この見解に大筋として異論はない。そして、その蔣の持久戦を実質的に支えたのが正規戦よりも持久抗戦を前提とする遊撃戦であった。

- (3) 蒋介石「第二次南嶽軍事會議訓詞」一九三九年一〇月二九日、『蔣總統思想言論集』卷一五、二〇二頁。

- (4) 蒋介石「抗戦檢討与必勝要訣」（下）、一九三八年一月二二日、『蔣總統思想言論集』卷一四、八九〇頁。

- (5) 蒋介石「第一次南嶽軍事會議訓詞」（二）、一九三八年一月二六日、『蔣總統思想言論集』卷一四、二九三～二九四頁。

- (6) 蒋介石「第三次南嶽軍事會議訓詞」（三）、一九四一年一〇月二二日、『蔣總統思想言論集』卷一七、五三～五六頁。

- (7) 白（崇禧）副主任「關於游撃戦的問題」（上）、西南游撃幹部訓練班編『西南游撃幹部訓練班週刊』第二卷二期、一九四〇年二月一日。

- (8) 広東省政府秘書処編訳室『広東游撃戦』一九四〇年、一七六頁。
- (9) 何応欽「八年抗戦之経過」（南京中国陸軍總司令部）、一九五五年（初版一九四六年）、四六～四七頁。

- (10) 何応欽、同前、一八～二二頁。

- (11) 何応欽、同前、九五、九七～一〇一頁。

- (12) なお、何応欽（1890.4.5=1987.10.21）は貴州興義県生まれ。武昌陸軍第三中学卒業後、一九〇八年日本に留学し、振武学堂（周知のごとく、清朝が留学生のために日本陸軍士官学校の予備校として設立。蒋介石と同期）に入学した。また中国同盟会に入会。一時帰国後、辛亥革命に蔣らと共に

- 上海の役に参加、第二革命では江蘇陸軍第一師歩兵大隊長。第二革命失敗後、日本陸軍士官学校歩兵科第一期生（二六年卒）。日本語が堪能とされる。一八年貴州講武学校校長。二四年広州に黄埔軍官学校が創設されると、軍事総教官。広東国民政府が成立すると、蔣が第一軍軍長、何は副軍長。北伐が開始されると、蔣総司令の下で、国民革命軍第一軍長兼東路軍総指揮、二七年三月上海、南京を占領。二八年南京国民政府が正式に成立すると、第一路総指揮を辞任したが、第二期四中全会で中央執行委員、軍事委員などに就任、三月中央陸軍軍官学校教育長。その後、参謀本部参謀総長などを歴任、三〇年軍政部部長を兼任、さらに委員長行営主任、及び漢口、広州の総司令などを兼任した。対中共包圍攻撃では、蔣の「安内攘外」政策下で、陸海空軍総司令兼南昌行営主任に就任、その指揮に当たった。日本の華北分離工作の際、塘沽停戦協定、三五年梅津・何応欽協定を締結、また冀察政府委員会を成立させた。三六年西安事変の際、中共との停戦に反対、自ら「討逆軍総司令」となった。抗戦後、第四戦区司令官、参謀総長などを歴任、三九年最高国防委員会委員、四四年陸軍総司令となり、中国勝利時、支那派遣軍総司令の岡村寧次と直接折衝。四六年アメリカに行き、連合国軍事参謀団の中国軍事代表団団長。台湾逃亡後、五〇年中央評議委員、国民大会主席、八六年總統府資政などを歴任。なお、六五年日台友好促進の功により日本から勲一等旭日大授章を贈られている（栃木利夫「何応欽」、山田辰雄編『近代中国人名辞典』霞山会、一九九五年、二六六～二六八頁。『中国近現代人名大辞典』中国国際広播出版社、一九八九年、三〇九頁など参照）。
- (13) 何応欽、前掲書、七〇九、九四〇～九五頁。
- (14) 『抗日戦争時期国民党正面戰場重要戰役介紹』四川人民出版社、一九八五年、一八〇～一九頁など。以下、『正面戰場』と略称。
- (15) (16) 『平郊演習日軍、昨晨突然砲撃我軍』『中央日報』一九三七年七月九日。
- (17) 『平市及四郊戒嚴、馮治安就戒嚴司令、津当局亦嚴加警備』『中央日報』一九三七年七月九日。
- (18) 『中日昨再約定復員、入夜日軍忽又進攻』『中央日報』一九三七年七月二日。

中国国民政府・国民党の正規戦とゲリラ戦（菊池）

- (19) 「社評・論蘆溝橋事件」『中央日報』一九三七年七月二日。
- (20) 『中国現代史』下冊、北京師範大学出版社、一九八三年、七頁など。
- (21) 『正面戰場』二二頁。
- (22) 『正面戰場』二一〇～二三頁など。
- (23) 何応欽、前掲書、二五〇～二七頁。
- (24) 『戦役介紹』二八〇～三一頁。
- (25) 石島紀之『中国抗日戦争史』青木書店、一九八四年、六五〇～六七頁など。
- (26) 『正面戰場』二五〇～三三頁。
- (27) 北京師範大学歴史系等編『中国現代史』下冊、一九八三年、一一頁。
- (28) 石島紀之、前掲書、六七頁。
- (29) 北京師範大学歴史系等編『中国現代史』下冊、一九八三年、一一〇～一二頁。
- (30) 石島紀之、前掲書、七六〇～七八頁。秦郁彦『日中戦争史』原書房、一九七九年新装版、一四七〇～一五一頁など参照。
- (31) 石島紀之、同前、七四〇～七六頁など。
- (32) 『正面戰場』三六〇～三七頁。なお、唐生智(1889.10.12-1970.4.6)は湖南省東安出身。保定軍官学校第一期卒。湘軍に入隊。辛亥革命、討袁・護法戦争に参加。一九二六年湖南省代理省長、国民革命軍第八軍軍長、北伐軍前敵総指揮などを歴任後、湖南省政府主席。九・一八事変後、南京国民政府軍事参議院院長。七・七事変後、南京衛戍司令に任命されたが、「南京大虐殺」前に撤退。その後、軍事委員会委員の地位は継続したが、故郷の東安などで過ごし、政治的活動はおこなわなかった。抗戦勝利後、和平を主張、湖南和平解放工作に参加。人民共和國成立後、全国人民代表大会常務委員、全国政治協商会議常務委員、国防委員会委員などの要職を歴任した（『中国近現代人名大辞典』中国国際広播出版社、一九八九年、五九七頁。塚本元「唐生智」、山田辰雄編『近代中国人名辞典』霞山会、一九九五年、七八〇～七八一頁などを参照）。
- (33) 『正面戰場』三七〇～三九頁。
- (34) 魏宏運主編『中国現代史稿』下、黒龍江人民出版社、一九八一年、五〇頁。

- (35) 何応欽、前掲書、四三〜四五頁。
- (36) 虞奇『抗日戰爭簡史』上冊、黎明文化事業股份有限公司、一九八五年(第四版)、二八八〜二八九頁。
- (37) 何応欽、前掲書、七二頁。
- (38) (39) (40) 『正面戰場』四二〜四九頁。
- (41) 何応欽『八年抗戰之經過』一九四六年、七九〜八一頁。
- (42) 虞奇、前掲書上冊、二八六〜二八七頁。
- (43) (44) 『冀豫各地民衆奮起、動員參加抗敵工作』『中央日報』一九三七年一月一日。
- (45) 『正面戰場』五二〜五四頁。「韓復榘の死刑、最高軍法會議の結果」『函館新聞』一九三八年一月二六日。
- (46) 魏宏運主編『中國現代史稿』下、黑龍江人民出版社、一九八四年、五一〜五四頁。何応欽、前掲書、七三〜七四頁。
- (47) (48) 『正面戰場』六五〜七〇頁。
- (49) 白(崇禧)副主任「關於游擊戰的問題」(下)、『西南游擊幹部訓練班週刊』第二卷三期、一九四〇年二月八日、三頁。
- (50) 魏宏運主編、前掲書下、五三頁。
- (51) 『正面戰場』五五〜六〇頁。
- (52) 虞奇、前掲書上冊、二八八頁。
- (53) 『中央日報』一九三九年三月二日。
- (54) 『我攻入濟南』『重慶各報連合版』一九三九年五月二五日。
- (55) 『抗戰建國綱領』『東方雜誌』第三五卷四号、一九三八年二月二六日。
- (56) 『正面戰場』七一〜七九頁。
- (57) 何応欽、前掲書、九二頁。
- (58) (59) 虞奇、前掲書下冊、五七七〜五八〇頁。